
火トカゲと少年

唯人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

火トカゲと少年

【Nコード】

N6867R

【作者名】

唯人

【あらすじ】

戦乱に揺れる世界。一切の記憶を失った少年はこの世界で生きていく事を余儀なくされる。彼は一体何を求めているのか。仲間・友情・恋愛・裏切り・戦争。彼と彼を巡る人たちの織りなす物語。

プロローグ

少女は森の中で震えていた。
その瞳には恐怖の色が浮かんでいる。

「お母さん……、お父さん……」

寂しげにつぶやいた。

少女は目の前で家族を殺された。

青の軍勢が彼女の住む集落を襲撃してきたのだ。

少女は運良くその襲撃から逃れることが出来た。父と母が文字通りその命に代えて少女を助けてくれたのだ。

少女の周りには同じように村を襲撃されて帰るところを失った人たちが。

みんなで体を寄せ合って森の中に隠れていた。

少女たちが隠れてからもうすでに二週間。それでも時折悲鳴や銃声が辺りに響いていた。

「家に、帰りたいよお……」

先ほど青年が食料をとってきてくれた。

ウサギ一匹と毛虫のような得体の知れない虫、そしてよくわからない木の葉っぱと花。

貴重な食料だからみんなで分けて食べた。

火をおこすわけにはいかなかった。煙でどこにいるかがばれてしまいかもしれないからだ。

だから、動物も、虫もそのまま食べた。虫は口の中でまだ動いていた。

恋しかった。

家で当たり前のように食べていた、ごはんが。

お母さんが作ってくれたシチューが。お父さんがつってきてくれた魚が。

そんな当たり前の食事がしたかった。

それでも、もうそんなことはできない。

料理を作ってくれるお母さんも、食料をとってきてくれるお父さんも、帰るべき家も、全部失くしてしまった。

少女の目尻に涙が浮かぶ。

その時――

草むらから音が聞こえた。

少女たちは一斉に動きを止める。

もしか、敵だろうか。

茶色だろうか。それならまだマシかもしれない。
青色だったら、最悪だ。

予想は悪い方が当たった。

「居たぞ！！ここに隠れてる！！」

姿を見せたのは青色の男だった。その手には銃。

少女たちは慌てて散り散りになって逃げた。

銃声と悲鳴を背中越しに聞きながら。

走った。必死に、必死に。

見つければ殺されてしまう。

流れる涙もそのままに、必死に走った。

どれくらい走っただろう。

青色の人たちは周りに居なくなっただけで、少女と同じ緑色の人たちも居なくなってしまった。

みんな逃げ切れたのだろうか。それとも捕まってしまったのだろうか。

少女にはそれを確かめる術はない。ただ、一つわかっているのは、

「ひとりぼっちになっちゃった……」

少女が俯きながら歩いていると、躓いてしまった。木の根に足を取られてしまったのだ。

前のめりに転んで、膝からは血が滲み出る。

少女は立ち上がる気力も出ず、うつぶせのまま地面に突っ伏した。また、目頭が熱くなる。

——私が一体何をしたというのだろう。私たちはおとなしく暮らしてただけなのに。どうして銃を持った人間たちに追い回されなければならぬのだろう。

——何でこんなことになってしまったの？

零れてくる涙が止まらなかった。

そのままにしていると少女の視界に誰かの足が見えた。少女を見下ろしているのだろう。

——もうイヤだ。いつそのこと殺して欲しい。

少女は最期を覚悟し、目をつぶった。

だが、覚悟した衝撃はいつまで待ってもおとずれない。それどころか少女にかけられた言葉は男の子の優しい声色だった。

「大丈夫？」

「……え？」

少女は声の主を見上げる。

逆光で色は確認できない。でも、髪は今まで見たこともないものだった。

「安心して、きっとエホバ様が助けてくれるよ？」

「エホバ、さま？」

年の瀬は少女と同じくらい。少女には少年の言葉の意味がわからなかった。

「そう、エホバ様。君はわるものに追われているんでしょ」

「わるもの……？」

少年はうなずきながら言う。

「そう、わるもの。エホバ様はわるものをやっつけてくれる、ヒーローなんだ」

「ヒーロー？エホバ様って、強いなの？」

「うん、すごく。エホバ様はね、すごくつよくてすごくやさしいの。困っている人たちを助けてくれるんだ」

「ねえ、ここ、どこ？」

「ここ？森の中だよ？」

もしや、ここがもう天国だというのだろうか。

私はとっくにもう死んでしまっているのだろうか。

「ねえ、あなたはいたい……？それに、エホバ様ってなに？」

「僕の名前は――、それからね、エホバ様って言うのは――」

物語は、ここから始まる。

プロローグ（後書き）

前回あげていたものの改訂版です。

とある事情により前回投稿していたものの続きの作成が困難となつてしまいましたので、こちらに改めて投稿させていただきます。

第一章 赤髪の少年

「あゝ、待て！！話せばわかるって！！」

「ああ？話せばわかる、だと？」

「そうだ！！これには海よりも深く山よりも高い事情が――」

「んなもん、知るか！！今ある事実はお前が金を持たずにうちの店で飯を食ったという事実だろうが！！」

「いや、だから財布持ってきたから大丈夫だと思ったら金が入ってなかったんだって――」

「問答無用！！てかお前のせいだろ！！」

とある店での一コマ。

追い詰め、威圧する店主に、店の角で小さくなりながら賢明に言い訳する赤髪の少年。

この店でおなじみとなりつつあるこの光景に店の他の客達は隠しもせずにクスクスと笑い声を上げている。

「なあゝ、頼むよ、おっちゃん……」

「おっちゃんじゃねえ、俺はまだ20代だ！！」

「え、そうなの！？でもおっちゃん、頭――」

「ああ！？今何だったコラあ」

「イエナニモイッテマセン」

「本当か！？後退しはじめた髪に！！俺が毎日様々な努力をしている髪の毛について何か言わなかったか！？」

「イエナニモ」

見つめ合う両者。

てめえ嘘ついてんだろ！？

イエナニモ。

いや、俺の頭について触れただろ!?

イエナニモ。

無言の攻防。

数十秒の攻防の末に、店主が諦め気味に言葉をかけた。

「あゝ、もうわかったよ。許してやるよ」

「ホントに!?! いやーさすが、おっちゃんサンキュ!」

「あーもう良いっての。だがよ、フェン!! その話は許してやるが無銭飲食は別だぞ――っってもう居ないのかよ!!」

苦々しげな表情で頭をかく店主。だが、それでも怒りはあまり感じられず、どこか暖かい雰囲気だった。

「あんなんで中隊長なんて務まるのかねえ、ファンデル様」

店主がぼやいている一方で先ほどの赤髪の少年は意気揚々と町を歩いていた。

「フェン君、なんか嬉しそうだね」

「ん? ああ、タダ飯食えたし、出世もしたしな。順調順調!!」

少年の名はフェノア・ニクス。

だが、今声をかけた市民のようにフェンと呼ぶものがほとんどだった。

ちなみにフェンはこの国、アナーヒタの兵士であり、歴とした中隊長でもあるので、フェン様と呼ぶべきなのだがフェン自身がそう呼ばれることを嫌い、昔から知っている市民は親しげにフェン君と

呼ぶ。ちなみにこの都市の名前はアイツヴェン。アナーヒタの王都（その名の通り王の住む街——首都）である

「それにしても、な〜んで俺があんな女の所に行かなきゃならないんだよ」

先ほどの楽しげな表情とは一点忌々しげな表情。
舌打ちまでつくおまけ付きだ。

「だいたいファンデルのおっさんだってあいつが俺のこと嫌ってるのわかってるはずだろ？」

誰も聞いている人など居ないのに言葉を続けるフェン。
それほどまでに苛立たしいのだろう。

フェンはその後もぶつくさと文句を言いながら目的地へと足を進めた。

◀

フェンの目的、それはニーヌ・イドという少女にファンデルからの届け物を渡すというものだった。

フェンとニーヌの関係は長い。
いわゆる腐れ縁だ。

全ての記憶を失っていたフェンがこの都市・アイツヴェンで暮らし始めてからの間。

2人の関係性は剣術の師匠と弟子であった。

いや、師弟関係よりも明確な主従関係というべきか。

それも敵意すら感じるほどの罵詈雑言を浴びせられたフェン。

我ながらよく耐えて修行に望んだとフェンは思う。

——だから、違うっての！！何回言ったらわかるのよ。

——はあ……フェン、あなたって本当にバカで間抜けでバカでアホでバカなのね。

——あんたみたいなバカにはわからないかもしれないけど、この修行の大事なところは……

——あんたみたいな間抜けにはわからないかもしれないけど、それをしっかり意識しないと……

——はあ……あんたみたいなアホにはわからないかもしれないから、私がやるわ……

フェンは頭を振って思い出したくない記憶を遠くへ放り去る。

ニーヌに一体何度バカと呼ばれたことか。

一体何度アホと呼ばれたことか。

思い出すだけで苛々してきた。

「あゝ、もう！！変なこと思い出すのはもうやめ！！今の俺はそんな事してる場合じゃないんだから！！」

「うるさいわねこのバカ！！」

「うおお、何だ、お前は急に！！」

独り言のつもりが思わぬ所から返答がありフェンは文字通り飛び

上がる。

「急にも何もあんたがここに来たんでしょ!？」

「へ!？あゝ、確かに言われてみればここは……」

フェンはいつの間にか鍛錬場に着いていた。

ニーヌが常日頃訓練に励んでいる鍛錬場。

ちなみに言うと、フェンがニーヌに数々の罵詈雑言を浴びせられた鍛錬場でもある。

「それで？何なの？とうとう頭がおかしくなった？」

「っおまえ何いって——」

「あ、違うか。頭がおかしいのは前からだったわね」

言い返そうと口を開くが上手く反論の言葉が出てこないフェン。
フェンは長嘆すると、ひとまず、自らに課せられた任務に集中することにした。

怒るのは、後だ。

「ファンデル様からニーヌに届——」

「あら、バカのくせに無視するのね」

この女、いつか絶対ぶっ殺す。

それまでは我慢だ、我慢。

フェンは衝動的にこみ上げる殺意と憎しみをこらえ、妨げられた言葉を続ける。

「お前に届け物だそうだ」

「……ファンデル様から？」

「ああ、そうらしい。中身は俺にはわからん」

ニーヌはフェンの言葉に返事もせずに淡々とその包みをあける。
その包みから現れたのはきれいなネックレスだった。

トップには水色の小さな宝石。

ニーヌの水色の髪とはよく映えそうだった。

「は～きれいなアクセサリーだな。ファンデル様もいい年来いてマ
メな事するんだな」

「マメなことって……」

「だってそうだろ？ お前もお返しに何かすれば良いんじゃないか？
あゝたとえばケーキ作るとか？」

フェンは何気なく言葉を返したのだがニーヌにキツと睨まれた。
何か地雷でも踏んでしまっただろうか。

えーと。今言ったのは、お返し……ケーキ？

あ、こいつもしかして料理できないのか？

それで何か失敗したことでもあるんだな？

「あ、いや。悪い。ケーキじゃなくても良いよな。それじゃあ花で
も摘んで花束とか——」

言っと思う。

いや、それは何でも不似合いすぎる。

この女が一回り以上年齢離れたファンデルのおっさんに御礼の
花束を渡す。

考えただけで気持ち悪い。

「あ、いや。悪い。それも変な話だよな。……んと、そだ。じゃあ
軍功を挙げて活躍すれば良いんじゃないか？ そうすればきっとファ
ンデル様も——」

「ねえ、さっきから何を意味わからないこと言ってるの？」

ニーヌがフェンにむかって言葉を投げる。

冷たい空気。ニーヌの目つきは可哀相な動物を見る目であった。

「は？ いや、だから、料理も出来ない、花束も似合わないお前だからファンデル様へのお返しに何が良いかなんて――」

ヤバイ。

今度こそ地雷を踏んだ。

フェンは一気に顔が青ざめた。

ニーヌに殴られると思ってフェンは慌てて身構える。

だが、耳から聞こえてきたのは悲しげなため息だった。

「あんた、何も聞いてないのね」

「何の話だ？」

「私、ヴァサームへ配属になったの」

「へ？ お前が？」

「そう。来週から私の部隊と他の部隊が何個かがヴァサームへ配属になったの」

「……ヴァサームっていやあ、あそこは」

「そう、ストリボーグとの最前線都市ね。町の引き替えに代わりに多くの兵が犠牲になる。今までにヴァサームを担当した中隊長は全員戦死したそうよ」

フェン達の国・アナーヒタは隣国ストリボーグと交戦状態にある。数十年にも及ぶ交戦状態。かろうじて大戦とはなっていないが細かい諍いは絶えなかった。

その最前線都市、ヴァサームへニーヌが配属になったと言う事実
はフェンにとって衝撃だった。

「何だってそんな急に？」

「決まってるでしょ。前まで配属されていた中隊長が戦死したのよ。私はそうはなりたくないから修行しているって訳」

「……切り替えが早いんだな」

「そりゃあそうよ。軍に仕えてるのだから」

ニーヌはそう言うのと未だ持っていた剣を腰にしまうと地べたに寝転んだ。

やっぱりあんたはバカなのね、とのたまいながら。

「ファンデル様からのこのアクセサリーは餞別でしょ。フレイヤ姉様がアソールに配属になったときも同じようにアクセサリーを贈っていたから」

「そう言うことか……俺はてっきりあのおっさんが年甲斐もなくプレゼントしてるのかと」

「ファンデル様がそんなことするはず無いでしょ」

「いや、そりゃそうなんだが、普段のあの姿を見ているとどうにもやりかねないというか……」

フェンの言葉にニーヌはクスリと笑いを零す。

ニーヌの笑い声を久方ぶりに聞いたフェンはニーヌの方を盗み見るが、相変わらずニーヌは空を茫然と見上げていた。

その姿を見たフェンはニーヌに見習って地べたに寝転ぶことにした。

澄み切った青空を流れる雲が目眩しい。

太陽は穢れた自分を変わずに照らしてくれていた。

「ま、がんばれよ」

「ん？」

「せいぜい死なないように頑張ってくれよって。お前が死んじゃったら次はきつと俺がヴァサームに行かなきゃならないだろ？俺はただ死ぬのは御免被りたい」

「……」

その言葉の真意を問おうとニーヌはフェンに目をやる。

だが、フェンは相変わらず空を見上げていた。

表情は無。一切の色がなかった。

「ん、どうかしたか？」

「いや、あんたたって変わんないな〜って思ってる」

「どういう意味だよ？」

「戦場の最前線に向かう人、それも半ば命を捨てに行くような人に向かってそんな言葉をかけてくるのはあんたぐらいよ」

「そうか？」

「そうよ。ソグノさんなんか、腫れ物を扱うみたいな話しかしないから挨拶もそこそこに逃げて来ちゃった」

「想像できるな」

しばしの沈黙。

頭上の雲が一つ、流れていった。

「あんた、この国に来てから何年だっけ？」

「なんだよ、いきなりそんなこと」

「いや、どうやったらあんたみたいなバカが出来上がるのかちよつと興味でたのよ」

「は？」

「それで、何年前だっけ？貴方が森の中で拾われたのって」

「まあいいけどよ。6年前だったかな、俺がファンデル様達に拾われたのは――」

6年前。

フェンはこの国の英雄、ファンデル・ニクスが率いる部隊に森の中で保護された。

ファンデル・ニクスはとある任務の帰りだった。

偶然の出会いだった。

もし、ファンデルがフェンのいる場所に行かなかったなら、

もし、フェンがもう少し早く意識を取り戻していれば、

もし、もう少し時間がずれていたならば。

だが、それでも2人は出会ってしまったのだった。

その出会いが2人の、そしてこの大陸で生きるもの運命を大きく変えることになるとは思っていなかっただろう。

ファンデル達は森の中でとある任務を遂行した後、帰りにとある場所へと寄った。

遺跡だ。

この大陸の森の中には古代人が住んでいたと思われる遺跡が点在している。

家の跡や、池などが点在する遺跡。

フェンはそこで拾われた。
ファンデル達がそこで意識を失って倒れていたフェンを見つけたのだ。

『何でファンデル様は遺跡に？』

『景色が綺麗だったんだよ。ただ、それだけらしい』

『それだけ？』

『ああ。俺を見つけた時にそこに寄った目的はそれだけだったらしい』

『？』

ファンデル達はフェンを慌てて保護し、王都・アイツヴェンへ連れて行った。

彼を、どうするべきか、と。

『そこで当時のえーと、なんてったつけ王様の名前』

『救いようもないくらいにバカね、このバカ。アナーヒタに仕えるんだから先代王の名前くらい覚えてなさいよ』

『悪い、って』

『はあ……ニヌルタ王よ。ニヌルタ様』

『ああ、そうそう、ニヌルタ様だ。とにかくニヌルタ様とファンデル様、それから他にも何人かで俺を見つけたときの状況と俺の処遇について話し合っていたらしい』

『その話は聞いたことあるわ。なかなか揉めたそうね』

『ああ。俺は赤髪だ。赤髪の間人なんてこの大陸で存在したことがない。そんな人間を拾ってきたんだ。かなり揉めたそうだな』

王とファンデル達の会議は長引いた。
錬金術師達（この大陸では錬金術の研究が進められている）からの過激な意見も飛び出した。

「やはり、前代未聞の人物だ！この国において置いては危険だ！！」
「それは困ります！錬金術学では赤色は神との合一を示している…
…少年が何者かはわかりませんが、そのような邪険な扱いは錬金術師として許せん！」

「しかし、かといってあのような身元のしれない人間をこの国に置いておくわけには——」

話し合いは混迷を極めた。

だが、ファンデルがとある申し出をしたことで騒動は解決した。

「私に、あの少年を引き取らせてくれ」

多くの人間が反対した。

ファンデルはこの国でも最重要戦力だ。軍事面で、内政面で、多くの貢献を果たしている。

そのファンデルの身柄に何か危険な事態が起こっては困る、と。
結局、ニヌルタはファンデルに森の中で発見された少年——フェンの身柄を一任した。

ファンデルは後日、意識を取り戻したフェンを引き取り、育てた。

『ファンデル様も度量が広い御方よね。あんたみたいなバカを引きうけようって思うなんて』

『いい加減、俺をいちいちバカと呼ぶのは止めろ』

『何だよ。バカにバカと言って何が悪いのよ』

『それを止めろと言ってるんだ！！』

『……はあ、わかったわよ、スカポントン』

『……この貧乳女』

『フェノア君、何か言いました？』

『イエナニモイッテマセン』

『そう、私の聞き間違いじゃなければ何かとつても失礼なことを言われたような——』

『空耳だと思うデス、ハイ』

『本当でしょうね？』

『ホントデス』

ファンデルはまずフェンに覚えていることはないか尋ねた。
だが、フェンの答えはきまって——何も、覚えていません——だった。

記憶喪失。医師はフェンをそう診断した。

ファンデルは記憶を全て失い、赤子のような状態のフェンに様々なことを教えた。

この大陸で生きるすべやこの国の現状。

アナーヒタは隣国ストリボーグと交戦状態が長い。またもう一つの隣国ガッスルフニンとも戦争の火種はくすぶっている。

そのためこの国では軍制を敷いている。兵役の義務こそ無いものの多くの国民（特に男達）は軍に志願する、と。

ひとしきりファンデルがフェンにこの国の成り立ちを教えているとフェンが並々ならぬ興味を示したことがあった。

魔術だ。

『魔術って良い響きだよな、本当。聞いたこと無かったからこの国

では魔術が一般的だなんて聞いたときにはすっげえテンション上がっちゃったよ』

『聞いたこと無かったって、フェン、じゃなかった、バカ、でもなくて、スカポントンはそもそも記憶喪失だったでしょうに』

『わざわざスカポントンと言い直すな!!』

ファンデルはフェンに魔術について教えた。

この大陸での魔術には精霊の協力が欠かせないこと。

精霊は全ての人が例外なく体内に従えていること。

その精霊には風・水・土の3属性があること。

そしてその精霊たちの属性によって得意とする魔術が決められていると言うこと。

フェンは一通りの技術を教わると実際に精霊を召還してみた。

魔術を身につけるために。

だが、結果は驚愕のものだった。

『ファンデル様もまさか、フェン、じゃなくてスカポントンが火属性の精霊を従えているなんて思わなかったでしょうね』

『……、なあ、ニース。スカポントンはやめてくれ。何とか心にぐさぐさと突き刺さるんだ』

『じゃあボケナス』

『……いや、あの』

『あ、意外と良いわねこれ。ボケナス、ボケナス。うん、じっくりくる——』

『いや、バカで良いから!!むしろバカと呼んでください!!』

『……なに、あんたマゾなの? 鞭とかもってきて、ああ、どうか僕を撲ってください!!、とか言わないでよ』

『言うか!!』というかそんな性癖持っていないわ!!』
『ちよつと、バカが感染^{うつ}るからそんなに大声出さないでよ……』
『……泣きたくなってきた』

フェンの従える精霊の属性は火だった。

フェンは髪の色だけでなく、扱う魔術という点でも例外だったのだ。

火を扱う精霊なんて歴史上存在したことがない。

当然火を扱う魔術なんて未だ嘗て存在したことがなかった。

炎の魔術師、フェノア

その日からフェンはそう認知されるようになった。

前代未聞の風貌のみならず、前代未聞の魔術師。

再び王宮では物議を醸したのだが、フェンの人なつっこい性格と明るい性格からフェンを危険視する人間は減ってきていた。

一方、フェンは魔術と同様に剣術にも興味を示した。

剣術。師事を仰いだのはフェンと既に何度も会ったことのあるニーヌだった。

『それにしても、何で私に頼んだのよ』

『ん?』

『あんたの周りには他にも剣術に長けている人だって居たでしょ?』

『前に言ったこと無かったつけ?』

『は?』

『だから、ニーヌは強くてかつこよかったから頼んだんだって』

『あゝ……そんな話したことあったわね』

『そう、割と恥ずかしかったんだぜ、あれ言ったとき。ちゃんと覚

えておいてくれよ』
『ハイハイ』

フェンは同い年のニーヌから剣術を教わり徐々にではあるが剣術の腕を上げていった。

一方、ニーヌも剣術を磨きこの国で有数の剣士として名を馳せた。

数年後。

ニーヌは軍に志願した。

フェンはニーヌに軍に志願した理由を尋ねた。

「参考までに訊いておきたいんだが、何でお前は軍に入ろうと思ったんだ？」

「決まってるでしょ。強くなりたいの。もっと。もっともっと強く」

「軍に入らなくても強くなれるとは思うけど」

「それじゃ意味ないわよ。私の言う強さってのは肉体的な面だけではないの」

「は？」

「あんたには関係ない」

そして、その半年後。

フェンも軍に志願した。

幾多の戦を経験した。

多くの血が流れたが、フェンも、ニーヌも人を殺すことに躊躇いなど無かった。戦とはそういうものだ。

平和とは対極の、異世界の事態。

後にニーヌは中隊長へと昇進し、フェンも半年ほど後れて中隊長へと昇進した。

そして、今日に至る。

『意外と長話になっちゃったな』

『そうね。でもちよつと疑問なんだけどあんたが拾われたのが何年前か訊いただけなのにどうしてこう6年間の軌跡を聞かされなきゃならな——』

『そんなわけであんたも俺のことは何となく理解できたと思う』

『ちよつと、何また意味わからないこと——』

『まあ、これからのお話におつきあい願うよ。じゃ、また会おうぜ』

『ちよつとホントに頭、大丈夫!?!』

第二章 新たな配属地、アソール

ニーヌがヴァサームへ出発して数日後。
フェンはファンデルに呼び出された。

ファンデル・ニクス

この国の誇る最重要戦力であり、大陸最強と評される人物だ。
そのファンデルはフェンを保護した人物であり、育ての親とい
べき存在である。

周囲は家族のようなものだと思っていた。そして、フェンは最
近ファンデルと養子縁組を結び、ファンデルの義理の息子となっ
た。法的にも家族となっている。

「ファンデル様、じゃなかった、父様、失礼します」

「おお、フェンか。とりあえず座ってくれ」

フェンは自宅（ファンデルの家でもある）に戻るとファンデルの
部屋へと向かった。

「ニーヌの様子はどうかだった？」

「え、ああいつも通りでしたよ。相変わらず俺に暴言吐いてくるし」

「そうか、それはよかった」

「いや、よくないですよ」

不満げな様子を隠さないフェンにファンデルは笑いながら言う。

「良いことなんだよ、フェン。かつてのニーヌの様子を思い浮かべ

てみる」

「昔の様子ですか……？」

フェンはニーヌに始めて会った時を思い出した。
あれはイド家に食事に招待されたときのことだ。

——初めまして、えと、フェノア、っていいいます。

——ニーヌ。

——えと、同じ年なんだってね。ファンデルさんにそう聞いたんだ。

——そうね。

——えと、なんか、怒ってる……？

——いいえ。

——……。

——それじゃ。修行があるから。

棘をむき出しにし、隠そうともしない。

不用意に触れるものを傷つける薔薇のよう。

「会話らしいものは出来たか？」

「いや……」

「話しかければ返答は返ってくる。だが、それだけだ。会話は決して弾まない。私が話しかけても、ティアが話しかけてもそうだった」
「……」

「それでも、そうだな。お前がニーヌに剣術を習い始めた頃からか。徐々にニーヌは色々な人間に心を開いてくるようになった。会話も弾むようになったしな」

「そう、だったのですか？」

「そうだったのだよ、フェン。最初の頃の話の内容は主にお前の愚痴だったがな。だが、それでも大きな進歩だ」

「あの女め……」

「そして、今ではフェンに向かってバカだのアホだの短小だの不能だのと暴言を吐いてくる」

「……シリアスな雰囲気で唐突な下ネタを挟むのは止めてください」

「昔は必要最低限の言葉しか喋らなかったのに、だ」

「――無視ですか、そうですか……」

フェンは嘆息する。最もこのようなファンデルの態度はいつものことなので慣れているのだが。

「ニーヌは変わった。心を開くようになったし昔のように何かに取憑かれたように剣術に打ち込んでいるわけでもない」

「取憑かれたように？」

「ああ。最も本質的な改善はなされていないようだがな。それがなされるには少々時間がなさ過ぎたらしい」

「？」

「まあ、ニーヌの話はここまでにしよう。本題に入ろう」

「え、あ……はい。それで、何でしょうか」

「フェン、お前の配属先が変更になった。アソールだ」

「アソール？」

「ああ。ここ、アイツヴェンとヴァサームをちょうどつなぐ街だ。更に言えば他の街の主要な補給地点だ。ストリボーグの攻撃を受ければアソールから援軍の兵が出る。兵糧に困ればこの街から補給される。重要な交通の拠点だな」

「いや、そんなことは知っていますが……」

「お前もニーヌと同様に国境線付近の街に配属されるかと思ったが、アイシャ女王のお考えは異なったようだな。その点は幸運だったのかもな。ニーヌが不運だったという意味ではないが」

「いや、幸運とかそう言う意味じゃなく」

「ん、なにか不満か？」

「不満というか……あそこはちよつと……」
「そうか」

にこやかに笑顔で告げるファンデル。予想外の展開に虚を突かれたフェンもすぐに状況を立て直す

「いや、そこは聞き返すところではないのでしょうか」
「とりあえず、本題は以上だ」
「——また無視ですか、そうですか……」

その後もひとしきり長嘆しきったフェンだったがファンデルから伝えられた命令が覆るわけもなくフェンは渋々了承した。

「何でよりによってアソール、かねえ……」

アソールへの配属。

悪くはない。街は大きく発展した町であるし、治安も良い。昇進したての中隊長としては文句の無いような条件の街に配属されたフェンだが一つ非常に愁えている事があった。

それは、そこにいる1人の美女の存在。

ニーヌの姉、フレイヤ・イドの存在だった。

「フレイヤ様の居る街か……。何事もなければ良いんだけど、そうはいかねえよなあ……。俺の純潔もここまでか」

フレイヤ・イドはこの国有数の魔術師として知られている。天才——天から才能を賦与された人。フレイヤはそう形容されるほどの天才的魔術師であった。

見た目も絶世の美女と評される美貌。イド家の最高傑作と評されている。

フェンはニーヌほどは親しくないがフレイヤともプライベートでの付き合いも数度ある。

だが、フェンはフレイヤを苦手に行っていた。

何かと聞かれても曖昧にしか答えられないその理由。

フェンはもどかしい思いだった。

後日。

フェンは自らの部隊を引き連れてアソールへと向かった。

その足取りは重い。

半面、部下たちは美女として有名なフレイヤと同じ街に配属されたことに胸を躍らせていた。

「どうしたんで、フェン様？」

「い、いや、なんでもない」

「そうですかい？　なんか滅茶苦茶顔色悪いですよ？」

「いや、だから気にするな。それよりもフレイヤ様について何だが――」

「あ、そうだフレイヤ様！　いやゝ楽しみですねゝフレイヤ様に会えるなんて！！　俺は遠くで見たことしかないんでフレイヤ様に会うのは凄く楽しみなんですよ！！」

「そうそう！！　おかずにするのも恐れ多いようなフレイヤ様と同じ街に配属になるなんてよゝ。ほんっとフェン様の部隊で良かったぜ！！」

「お前ら……。いや、なんでもない」

フェンは街に着いた直後、フレイヤに挨拶に向かった。付いて来たがった部下もいたが、大勢で付いてこられると邪魔なので荷物の整理などをさせておいた。

フレイヤのもとへと向かう道すがらに町中の様子を観察する。

活気のある町並み。アイツヴェンほどではないが、市民の表情は生き生きとしている。

「へえ……。意外に元氣な町だな。さすがに交通の拠点だけあるか」

フェンは細かく様子を観察し直す。

目を凝らしてみれば、確かに旅人や商人など他の街からやってきたと思われる人間が多い。

辺りを見回していると、ある女性を見つけた

女性にしては高い身長。長い金色の髪の毛と澄んだ瑠璃色の瞳。

女性らしい華麗さと包容力を極限まで突き詰めた肉体と天女の再来とまで謳われた圧倒的な美貌。

圧倒的存在感を放つ彼女の周りは周囲の喧噪とは断絶し、時の流れすら周囲とはかけ離れているような感覚を覚える。

フレイヤ・イドだった。

フェンがフレイヤに気付くのと同時、フレイヤもフェンに気付く。

フェンに気付いたフレイヤは真剣な表情から、花開いたような笑顔に表情が一変する。

周囲の人間がそれだけでとろけてしまいそうな笑顔。

フレイヤはフェンに慌てて駆け寄りそのまま抱擁でも交わさんばかりの勢いだった。

訂正。

フレイヤはそのままフェンに思いっきり抱きついてきた。
フェンは動揺を隠しながらフレイヤの細い身体を離す。

「何で離すのよ!!」

「い、いえ。このような周囲の目のあるところでそのように積極的
に抱きつかれるのは何かと噂の的となってしまうのでは……」

「あら、フェノアは私と噂になるのが嫌なの？」

「い、いや、そう言うわけではありませんが……」

「そう？じゃあ仕切り直し！もう一度感動の再開を演出するわよ！
？今度はフェノアから私に抱きついてくるのよ？」

「いえ、だから、それは勘弁を願いたいのですが……」

しばしのすったもんだ。

周りの見物人も何事かと見ていたが、騒動の中心がフレイヤとフ
エンだとわかると、みな一様に暖かい表情を浮かべ各々の仕事に移
った。

「全く……まあいいわ。それで、いつこっちに着いたの？」

拗ねたように口をとがらせて言うフレイヤ。

一方フェンは、フレイヤがひとまず落ち着いた事に心の中で大き
く息をついていた。

「ええと、先ほどです」

「そう、お疲れ様、フェノア。この町は今のところ落ち着いてる。
ストリボーグやガッスルフニンも最近は大人しいみたいだから、し
ばらくはゆったり出来ると思うわよ」

「そうですか。それは何よりです。それでフレイヤ様おたずねした
いことが――」

フエンは事務的なことを数点尋ねると、フレイヤと別れた。最も、去り際に今夜の約束を取り付けられたことに嘆息したが。

「フレイヤ様はなあ……スゴイ美人だし、ああやって積極的なのはうれしいんだけどよ……。どうにも俺は苦手なんだよなあ」

¶

その晩

フエンがフレイヤとの約束の店に向かっている最中、一つの小さな影が目にとまった。

その影の大きさからは子供だろう。女の子のようにも見える。そうすると、いくら何でもこんな時間に女の子が1人で行くのは些か危険だ。

フエンはとりあえず声をかけることにした。

「なあ、お前、1人か？」

その影はびくつと震えるとフエンの方を寂しげに見上げた。

黒髪の少女。10歳前後だろうか。

その女の子は小さくうなづく。

「そか、お母さんでもはぐれたのか？家はどこだ？」

フエンの言葉に少女はやや俯いて、躊躇いがちに右手を挙げて指を指す。

その指さす方向は町外れの山の方角。孤児院のある場所だ。

この町には戦争で親を亡くした孤児達を色んな街から引き取る大きな孤児院がある。

フレイヤがこの町に配属になったときに、フレイヤ様が主導になって創設したのだ。

——お母さんとはぐれた、なんて悪いこと言っちゃったかな。

「ん。あっちか、じゃあ近くまで連れてってやるよ。お前、名前、何ていうんだ？」

「……」

フェンがかける言葉に返事をしない少女。

それでもフェンは気にせず歩き始めた、のだが。

少女が後ろに付いてくる気配はなかった。

フェンが振り返ってみてもその少女は顔を伏せてボーッとたたずんでいる。

「……なあ、せつかく人がお前の帰るところまで連れて行ってやるって言ってるんだから付いて来いっての。怖いおにーさんにいじめられちゃうぞ」

フェンの言葉にフェンの方を指さす少女。

「俺はアナーヒタのちゃんとした兵士だったの。ほら、このまま暗くなっちゃったら危険だろ？ 帰ろうぜ。連れてってやるから」

女の子は黙ってうなづく。

「だろ？ じゃあ帰るぞ。俺がそこまで連れて行ってやるからよ」

そう言って再び歩き始めると女の子はようやくフェンの後ろを付いてきた。

相変わらず顔を伏せ、何もしゃべらないまま。

結局フレイヤとの待ち合わせの店に着いたのは約束の時刻より30分ほど遅れた頃だった。

その女の子を送っていったのだが小さな子供の歩くスピードに合わせたために相当時間がかかってしまったのだ。

当然、フレイヤにもブツブツと小言を言われる。

「せっかくデートの約束を取り付けたのに遅刻してくるなんて」

「いえ、だからすみません……」

「全く、今夜はとことん付き合ってもらうからね」

「……とことん……?」

「そう、もちろん私の家までね。据え膳食わぬは男の恥よ?」

「女性の方からそのような言葉を使うのはどうかと……」

「なに、せっかく勇気を持って誘ってるのに私なんかじゃダメって言うの!? ヒドイわヒドイわ!!」

「いえ、決してそう言う意味では……」

誘惑の言葉に時折挟まれるボディタッチ。

フェンとしては非常に居心地が悪かった。

ちなみに店は普通の普通の大衆居酒屋。

周囲の一般客は思わぬ2人の組み合わせでの登場に聞き耳を立てているものも居たため、フェンとしては更に落ち着かない気分だった。

だが、そんなすったもんだも1時間する頃には落ち着く。

フレイヤもすっかりいつもの様子に戻り、話題はお互いの近況にうつった。

「ニーヌには会ったの？」

「え、あ、はい。いつも通りと言ったように見えましたわ」

「そう。それなら良かったわ。ヴァサームに配属になるから気負ってるかと思ったけどそれなら安心したわ」

「はあ、そうですね」

「ん？何か不満？」

フレイヤは片眉を上げて尋ねる。そしてやや上目遣い気味。

計算してやっているのかと思うが、これがフレイヤの天然と言うことをフェンは知っている。

「いえ、ファンデル様と同じ事を仰るので……」

「ファンデル様も私と同じ考えなのね。そりゃあニーヌは強いわよ。まだ18歳なのにこの国有数の剣士といわれているだけあるし。それでも変に気負っていったらニーヌだってさすがに負けちゃうわよ？」

「はあ……」

「そうよ。まあ、フェノアにはあまりわからないかもね」

「どういう意味ですか？」

「ニーヌはあなたのことを気に入ってるみたいだもの」

飲みかけのビールを噴出しかけた。

口から黄金の色を噴出すマーライオン。

「ゴホッ……ゴホッ……。何を変なことを言うんですか！！」

「そのままの意味よ。あ、もちろん恋愛的な意味じゃないわよ？」

「そんなことわかってます！！」

「うーんと、なんて言えばいいかしら。あの子も色々と苦労してるのよ」

「？」

「そのうちわかるわよ」

「はぁ……？さっぱりわからないのですが……？」

「いいから！！この話はオシマイ！！それよりも、なによ、フェノア、ニーヌのことでも好きなの？」

再びビールを噴出すフェン。

マーライオン、再び。

「だから、何でいきなり変なことを言うんですか！？」

「当たり前じゃない！！せっかく2人きりだって言うのにニーヌの話なんかして」

この話題はフレイヤ様からしてきたのでは？、とはいえないフェン。

地雷原に飛び込む勇氣はなかった。

「いえ、ですからそんなことはありませんが……」

「嘘言いなさい！！」

「……いや、ニーヌに対して恋愛感情なんて持っていませんが」

「ホント??？」

浮気がばれた夫のように責め立てられるフェン。
フレイヤに責められる言われもないというのに。

「ホントです！！」

「ホントでしょうね。嘘だったら私と今度こそ結婚してもらおうからね？」

「はあ……」

どっと疲れるフェン。

フレイヤはため息をつくフェンの様子を満足げに眺めると、話を変えた。

「そういえば、フェノア。明日孤児院に顔を出してくれない？」

「……また急に話題を変えますね」

「だってさっきのは過ぎた話でしょ？いつまでもフェノアの浮気疑惑を追及してもつまらないもの」

「浮気も何もそもそも俺はフレイヤ様は付き合ってなんかいません——」

「それで、孤児院に来てもらえる？」

容赦なくフェンのぼやきをぶった切るフレイヤ。

この世界の不条理さを嘆きたかったが、そうも言ってられないので諦めてフェンはフレイヤの流れに乗った。

「……それは構いませんが……どうして俺が？」

「うん。ちょっと頼みたいことがあるのよ」

「頼みたいこと？」

「うん。ちょっとある女の子のことなんだけどね」

フェンの脳裏に先ほどの黒髪の少女が浮かぶ。

最もその子であるという可能性はかなり低いだろうが。

「はあ……まあ、出来ることなら何でもしますよ」

「ありがと。ちょっと私だけじゃどうにもいかなくなつて、それで誰か相談に乗ってくれそうな信頼できる人が居ないかなあ、って思ってたの」

思わずフレイヤの顔をまじまじと見てしまった。

そのフレイヤは微かに頬を染めて手元のカクテルを飲んでいる。ちよつと照れているようにも見えた。

こうして普通にしていれば文句なしに可愛いんだけどなあ、と思うフエン。

さっきまでの様子とのギャップに少々どぎまぎとしてしまった。

「なんというか、そのような言葉をナチュラルに言えるフレイヤ様が少しうらやましいです」

「そう？それなら私の家に来て愛でも交わそうか？」

「いえ、それはご遠慮します」

それでも甘い誘惑にはのらないフエンだった。

その時、酒屋のドアが勢いよく開かれ兵士が息も絶え絶えに入ってきた。

酒屋中の視線がその兵に集まる。

「フレイヤ様！！」

駆け寄るフレイヤとフエン。

フエンは慌ててその兵の背中をさすり落ち着かせた。その兵にフレイヤが優しく問いかける。

「良いから、落ち着いて。何があったの？」

「……孤児院っ、孤児院に何者かが火を！！」

第三章 首、落ちる

孤児院。

数十年前から存在するこの孤児院は戦争で親を失った子供たちを中心に取り取って居る。

その孤児院は街の離れたところ、山のすぐ側に建てられていた。市街の中心部からは遠く、2人の居た飲み屋からは時間がかかる。2人が孤児院へと着いた頃にはもう既に火を消すことは困難に思えた。

燃える炎はかなり熱く、見ているだけで顔が焼けるような感覚。数人の魔術師が水系の魔術を放出し消火に当たっている。フレイヤも現場に到着するやいなや魔術を駆使し消火作業にあたるが焼け石に水であった。

火が完全に鎮火するまでには数時間を要した。

火災現場の探索と遺体の収容。

兵たちがそれを行っている最中にフレイヤは生き残った子供たちをなだめていた。そして、点呼を行う。

みんないるか、怪我をしている人は居ないか。フレイヤ達は慌て、泣き叫ぶ子供たちを賢明になだめすかしていた。

その時、山の方からこっそりとその子供たちの集団に戻ってくる1人の少女がフェンの目に入った。

黒髪の暗い目をした少女。

暗くて良く確認できないが昨日、この孤児院まで送っていった少女だ。

その少女はこっそりと野原の子供たちの居るところに入るとあたかも先ほどから居たかのように落ち着かない素振りを始めた。

そして、フレイヤのもとへ駆け寄る。

——あの、女の子……

フェンはその少女のことを脳裏にインプットした。

結局今回の火事の被害者は10名だった。
職員が3名。子供が7名。

100人近くの子供たちがすむこの孤児院だったが被害がこれだけですんだのは不幸中の幸いだった。

無論、それで被害になった10人の犠牲が浮かばれるわけではない。

10個の尊い命が失われたのだから。

▼

翌日、葬儀が執り行われているその場でフェンはフレイヤに昨日の火事について尋ねた。

場所が場所なだけにその不謹慎さを窘められたが、それでもフェンの真剣な眼差しにフレイヤは押し切られて答えた。

火事の火元となったところは女子トイレ。

そこには当然ながら火事の原因となる火種はない。

この孤児院には警備の兵が昼夜問わず居るが、火事の起こった前後で不審者が居たという報告はない。

また、前もって内部に侵入していることも考えにくい。

以上のことから内部犯による放火が疑われる。

フレイヤは陰しい表情をしながらそう締めくくった。

「フレイヤ様は、犯人に心当たりはあるのですか？」

「いえ、私には全くないわ……。いくら何でも子供がそんなことをするとは思えないし、かといってあそこで働いている職員達も信頼の置ける人物だし……」

「そうですか……」

ため息をはき出すフレイヤにフェンは少し躊躇いながらも昨日の少女について尋ねた。

「え、えーと、フレイヤ様、一つ伺ってもよろしいですか？」

「ん？ なーに？」

「昨日、見かけた女の子なんです、黒髪で、10歳ぐらいの女の子、居ませんでした？」

「んー……それだけじゃあちょっと……」

「えーと、昨日フレイヤ様の足下へ駆け寄って抱きついてた女の子なんです……」

「んー……ああ、カメラアの事かしら」

「かめりあ？」

「ええ。カメラアって言う女の子。そう言えばあの子についてあなたに相談したかったのよ」

「え、そうなんですか？」

「ええ。相談したいことがあるって言ったでしょ？ あの子、暗くて笑わないし、あまり言葉も喋らないのよね……」

「そう、ですか……」

「うん、昔はお姉さんが居ただけで病気で亡くなってからはずっとあんな調子なの。それで、あの子がどうかしたの？」

「い、いえ。何でもあります」

「……そう？ なら良いけど」

フェンは話を切り上げると、再び葬儀の方へと意識を集中すると、いつの間にか焼香の順番が来ていた。

フェンは慌てたように焼香台へと向かうが、その背中にはフレイヤの視線が向けられていた。

「

仮設テント場。

孤児院の近くには公園があった。火事で住む場所を失った子供たちは一時的にその公園にテントを設営して暮らしている。

フェンは葬儀が終わるとすぐに目的の少女を探しにここにきていた。

カメラア。

昨日不審な動きをしていた少女だ。

目的の少女はすぐに見つかった。

公園に並べられている鉢植えにじょうろで丁寧に水をあげていた。

フェンは笑顔の仮面をかぶるとその少女に話しかけた。

「何、してんだ？」

カメラアはフェンの方を見上げたのだが、また視線を鉢植えへと向け無言で植えられている木に水をやり始めた。

フェンは気にせずには話しかけ続ける。

「これは……椿の木か？お前が管理してるのか？」

カメラアは微かにコクコクと頷く。

フェンはしゃがんで、椿の木に顔を近づけ、香りをかぐ。

時期が少し早すぎるからか花は咲いていないがいい香りがした。

「椿、好きなの？」

カメリアは初めて口を開いた。綺麗な透き通る声。それでも弱々しい声だった。

フェンは少女が自分から話しかけてきたことに驚きながら返事をする。

「ん？ そうだな……。一番好きな花って訳じゃあないけど、でも、好きな花だな。お前は嫌いなのか？」

「わかんない。でも、縁起……。悪いお花って」

「ん、ああ、そうだったな、そう言えば。花が枯れるとき、花ごと落ちるから首が落ちる、ってイメージがついたんだっけか。よく知ってるな」

女の子は寂しげに顔を伏せる。

「お姉ちゃんが死んだのも、きっと、このせい。椿のせい」

カメリアはそれだけ言うと、山の方へと歩いて行ってしまった。フェンは驚き、その背中を見送る。

「どういう事だ……。？」

そのまま見捨てることも出来ないフェンはこっそりとカメリアの後を付ける。

カメリアは森の中の茂みにしゃがみ込むと、ポケットから何かを取り出している。

そして、しばらくするとカメリアは再び公園のテントの方へと戻っていった。

フェンはカメラリアがテントへ入ったのを見届けると、先ほどカメラリアがしゃがんでいた辺りにいった。

そこにあるのは野生のタルケが数匹はいった昆虫採集用のかごだった。

タルケ。

またの名を火トカゲ。

その名前の由来は赤いトカゲだから、と言うわけではない。

この大陸では昔から火を熾すことが出来なかった。

他大陸より伝えられた火打ち石や木をこする事による摩擦熱。これらを用いてもこの大陸では火が熾きなかった。

それではこの大陸の人間がどうやって火を熾しているのか。

その答えとなるのがタルケだった。

過去にある非凡な人間がタルケを用いると火を熾せることを発見したのだ。

タルケを材料として、簡単な魔術を使う。そうすればいとも容易く火は着くのだった。

火を熾すために必要なタルケをこっそりと飼う少女。

少女は最近ひどく暗く、思い詰めた様子。

そしてその少女の住む孤児院が火事になる。

これが意味することは……？

「フェノア。どういう事？」

フェンは慌てて思考を中断して、振り向いた。

後ろに居たのはフレイヤ。険しい顔つきだった。

「どういう事、と仰いますと？」

「隠さないで。さっきのあなたの様子がおかしかったから後を付けていたの。今回の火事の手がかりを見つけたんでしょ？」

フェンは逡巡した。言うべきか、言わざるべきか。

だが、目の前にいるフレイヤをうまく誤魔化し通す自信はない。フェンは全てを話すことにした。

一通り話した後、フレイヤは手を顎に当てて眉間にしわを寄せる。そのフレイヤにフェンは申し出をした。

「フレイヤ様、このことは内密にお願いできませんか……？」

「どういう事？」

「少し、カメラリアのことを俺に任してほしいんです。俺にはカメラリアが放火したとは思えないんです」

「……根拠は？」

「ありません。ですが……」

「いいわ」

予想外の歯切れの良い即答。フェンは些か拍子抜けした表情で聞き返す。

「え、そんな即答で良いんですか？」

「自分で申し出ておいて何言ってるのよ」

「いや、それはそうなんですが」

苦笑し合う2人。フレイヤは再び表情を引き締めて言葉を続けた。

「私も、カメラリアがあんな事をする女の子だとは思わない。でも、

約束して。もし彼女が犯人だったらはっきりと私に言って頂戴」

「あ、はい。わかりました」

「あと、秘密にしてあげるんだからデート一回ね」

「……はい」

ウインクして言うフレイヤにずっとこけてしまいそうだった。

¶

フレイヤとの会話の後。フェンは再び公園に戻った。
そして、椿にまた水をあげているカメラアに近づく。

「あまり、水はやりすぎない方が良さらしいぞ」

「……え？」

予想外の言葉に思わず声を漏らすカメラア。
構わずフェンは続けた。

「だから、水だって。土が乾いたら水をあげる。それぐらいで良いんだとさ」

「……そうなの？」

「ああ。逆に水をやり過ぎなくてもダメみたいだけど」

「……」

その言葉に、水をやる手を止めたカメラア。
手持ちぶさた気味にテントの方へと戻ろうとするが、フェンに止められた。

「そんなに邪険に扱うなよ」

「……え？」

「だーかーらー！！俺がこうやって話しかけてるんだからもうちょっと話でもしようぜ」

「……ロリコン？」

「違うわ！！なんでそーなるんだよ」

うなだれ、頭をかくフェン。

カメラリアは不思議そうに首をひねると今度は近くにあったベンチに座った。

フェンもその隣に座る。

「フレイヤ様ってよくこの孤児院に来るのか？」

「うん」

「ふーん。それにしても、ほんとにカメラリアって大人しいんだな。街からここまで一緒に歩いた仲じゃねえか。もう少し喋ってくれても良いんじゃないかねえの？」

「……」

「はぁ……」

「大人しいんじゃない」

「ん？」

「だから、私は大人しいんじゃない」

堰を切ったように喋るカメラリア。その声色は先ほどまでとはことなりどこか強い意志が込められていた。

「大人しいんじゃない。ただ、暗いだけ。暗い性格なだけなの」

唐突に零れたカメラリアの本音。

だが零れたかと思えばそれはすぐに止まり、またカメリアは能面のような表情に戻ってしまった。

「そうかもな」

フェンの言葉に少女はびくりと肩を震わせる。

「優しい性格は頼りない性格。考えがしっかりしてる性格は頑固者な性格。大人しい性格は暗い性格。明るい性格はうるさく脳天気な性格。言葉なんてそんなもんだろ？」

「……」

「誰かに、カメリアは暗いだなんて言われたのか？」

「みんな言ってる。お兄さん、名前はなに？」

「ん？んと、フェノアだ。フェノア・ニクス。フェンって呼んでくれ」

「お兄さんの名前の意味は？」

「名前の意味……？ わかんねえんだよなあ……俺、記憶喪失でちっちゃい頃の記憶無くしてるから」

「……そう」

カメリアは少し驚いたように目を見開くとまた押し黙ってしまった。

フェンには今の会話でわかったことがあった。カメリアの悩みが。

「気にするな」

「え？」

「カメリアは自分の名前の由来が縁起の悪いと言われている椿からとられてることを気にしてるんだろ？ 椿は異国の言葉でカメリアとも言えるからな。でもそれは思い込みすぎだ。椿って言うのは――」

「そんなことない！！」

「カメラア？」

再び零れたカメラアの本音。それは激昂という形で現れた。

「思い込みなんかじゃない！！言葉ってすつごくすつごく怖いんだもん！！そのせいで、そのせいで色んな人が死んじゃうんだもん！！」

「……何があったんだ？」

「……何でもない」

カメラアはそう言うのと一目散にテントの方へと駆けだしていった。目には涙を浮かべながら。

フェンが思い当たったカメラアの悩み。

それは思いの外に深く、大きな悩みだったらしく、気軽に踏み込んでしまったフェンは自戒のために自分の頭を叩いた。

「何やってんだか……」

¶

翌日からフェンは毎日公園のもとへとやってきていた。目的はただ一つ。

カメラアの心の闇に触れることだった。

そして、毎日カメラアに話しかける。

「なあカメラア、街中へ買い物でも行かないか？」

「なあカメラリア、花が好きなら花屋でも行かないか？」

「おーい、カメラリアこっちで遊ばないか？」

だが、カメラリアはいくら喋りかけても言葉を返しては来なかった。何一つ変化のない繰り返しの日々が一週間。

フェンは今日こそは、と決意をしてカメラリアのもとへとやってきた。

「なあ、カメラリア。森の方へ行かないか？」

「……え？」

言葉を返すカメラリア。フェンはそれに手応えを感じながらまた言葉が続けた。

「いや、森の中を散歩しないかって？」

「……」

「来ないんなら俺1人で行くとするけど……この森、ちょっと色々面白いものありそうだろう？」

「……行く」

「お、そうか？じゃあ準備してきな？」

カメラリアは頷くとテントの方へと駆け出していく。

その背中を見ていると近くにいたフレイヤが寄ってきた。

「森に行くの？」

「はい。少し、ずるい作戦ですがね」

「……そうね」

「ええ。カメラリアはまだ森の中にあのタルケのかごを隠している。俺が森に行ってタルケの入った虫かごを見つけるとカメラリアとして

はまずい。だからカメラアとしては一緒に行くしかないでしょう」

「……まあ、カメラアのことは任せたわよ？」

「はい。やれるだけのことはやってみます」

「期待してるわ。期待を裏切ったらデート100回ね」

「……ちなみに期待に応えたら？」

「決まってるでしょ、デート100回よ」

ウインクするフレイヤ。

この女性はもう少し慎ましくならないものだろうか。

こんだけの美女に誘われているのだから一度くらい関係を持っても良いのかもしれないと思い始めてきたフェンでもあった。

森の中と言っても草木が生い茂り道無き道を行く、と言うわけではない。

この森はちゃんとハイキングロードも整備されており、行楽スポットでもあるのだ。

そして、そのハイキングロードを歩き始めて数分。

だんだんカメラアが虫かごを隠している辺りに近づいてきたため、カメラアの顔にはあからさまに落ち着きが無くなっていた。

「なあ、カメラア。野生のタルケって見たことあるか？」

「え？ な、なに？」

裏返った声だが気付かないふりをするフェン。

「だから、野生のタルケ見たことあるか？ って。この森どうやら野生のタルケが居るみたいなんだよな」

「見たこと、ない」

「そうか？ じゃあちよっと探そうぜ？」

「え、い、いや、大丈夫」

「なくにが大丈夫、だよ。いいからいいから。俺はこっちを探すからカメラリアはあそこらへんを探してくれよ」

フェンはそういうと自分がタルケのかごのある辺りを、カメラリアには違う方向を指さした。

慌てるカメラリア。

「あ、私がそっちやる!!」

「ん？」

「え、えと、私がそっちやりたいの!!」

「そうか？まあじゃあ頼むよ」

慌てるカメラリアの申し出の不自然さには何も気付かないふりをして了承するフェン。

フェンはそうして辺りの茂みを探す素振りをしながら、カメラリアの方を盗み見た。

カメラリアは少しほっとしたように辺りの茂みの中をのぞいている。そろそろ、頃合いだろうか。

「カメラリア、火事、大変だったな」

「え？」

「住むところ無くなっちゃったし」

「……それは別に」

「犯人、早く見つかると良いな」

「ハンニン？」

少し大きな声を出すカメラリア。

まだ、早い。もう少し揺さぶってから。

フェンはもう完全にカメラリアの方を向いて喋っていた。カメラリア

はそれでもまだ辺りの茂みの中を探す振りをしている。

「ああ、フレイヤ様から聞いたんだけど今回の火事。放火なんだとよ。誰かに火を付けられたらしい」

「……ウソ」

「ホントだよ。カメラリアは誰か変な人見なかったか？」

「見て、ない」

「そうか？些細なことでも良いんだ」

「……見てない」

「そうだな、例えば、燃える直前に変な物音を聞いた、とか、怪しい人が施設の中にいるのを見かけた、とか」

「……」

「あとは、施設にいる人が火事になる直前にどこか外に1人で出歩いていた、とか」

カメラリアの肩が微かに震える。

カメラリアは火事の直前に1人で街中に出てきていた。

「あとは、野生のタルケをこっそりと飼っている人を知ってる、とか」

再びカメラリアの肩が大きく揺れる。

しばしの沈黙。カメラリアが微かに声を出した。

「私じゃ……」

「何だ？」

促すフェン。

カメラリアは振り返ると大声を出した。
目には涙を浮かべながら。

「私じゃない!!」

「……?」

「孤児院なんてつまんなかった!」

尚も大声を上げ続けるカメラア。
表情は鬼気迫るものがあつた。

「みんな私のことをバカにしてるし、居なくなっちゃって!死んじやばいいって思った!!でも、私は孤児院に火なんて――」

「つけてないよ」

「え……?」

拍子を抜かれたようにフェンを見上げるカメラア。

フェンは出来るだけ優しい声で言った。

「お前じゃない。今回の火事を起したのはカメラアじゃないよ」

「……なんで?」

カメラアの目からはとうとう涙がこぼれ落ちた。一度流れ始めたそれはどンドン流れていく。

「昨日、街中のペット店に行って聞いてきた。火事が起こる直前に黒髪の小さな女の子が1人でタルケが食べるような動物用のえさを飼っていったと証言した。その少女の特徴は、カメラア、お前と一致した。お前がここに来ているのを初めて見たとき、お前がポケットの中から何かを出しているのが気になったんだ。あれはタルケの為のえさだったんだろ?」

「えぐっ、うっ、うう……」

「お前が火事が起こった後にここにやってきたのはもしかして今回

の火事の原因がこっそり飼っているそのタルケじゃないか不安だったんだろ？もしかして、このタルケを燃やしてしまったんじゃないか？」

「え、えぐっ、ど、どおじで……？」

「お前にとってはペット、いや、家族みたいなものなんじゃないのか？だから、火事の後に急いでここにやってきた。そのタルケが火事の放火に使われたⅡタルケは死んでしまったと言うことだからな」
「えぐっ……」

「不安だっただろ？ここに来なければこのタルケ達はえさを与えられない。でも、ここに来ているのがみつかるかと放火犯だと疑われるかもしれない。でも大丈夫だ。お前は犯人じゃない。俺はカメラリアが犯人じゃないことを知ってるから」

そこから先は言葉がいらなかった。

言葉にならなかった。

カメラリアはフェンのもとへと駆け寄り大声で泣きわめいた。
涙を流し大きな声を出しながら。

フェンはカメラリアとの距離が縮まったことに満足して今日はそのままカメラリアを返した。

タルケの世話はしばらくは自分がするから安心して放火犯が捕まるまで待て、と言いつ残して。

結果的に言えばこの選択は間違いだった。

フェンとカメラリアの距離はまだまだ遠かったのだ。

▼

翌日、フェンは浮かれた気分で公園に向かっていた。

昨日の森の散歩でカメラアとの距離はかなり縮んだはずだ。もう少し時間をかけてカメラアの心の闇を晴らしてやろう。そんなことを考えていた。

だが、公園に到着すると公園の異変に気付いた。
テントの方から大きな声が聞こえてきていた。

怒声。

叫び声。

両者が入り交じっていた。

慌てて駆け寄ると、そこには子供たちに囲まれるカメラアとそれをかばうフレイヤや数人の職員の構図となっていた。
テントから少し離れたところにはカメラアが必死に隠していたタルケのかごが寂しげにおかれている。

「フレイヤ様！！」

「あ、フェノア！！良いところに来てくれたわ——」

「フェノア様もカメラアに言ってくれよ！！こいつが俺たちの孤児院に火を付けたんだ！！」

「……どういう事だ？」

事の顛末はこうだった。

今朝。カメラアはまたこっそりと森の中のタルケに会いに行ってしまった。

フェンはまだタルケのかごを森の中においたままにしていたため、カメラアは簡単にそのかごを見つけた。

——しばらく会えなくなるからトカゲさんにお別れを言いたかったの

だが、他の子供がそのカメラアの後を付けていた。

——毎朝どこかにいなくなるから気になっていた

その子供はタルケにえさをやるカメラリアを見つけて大騒ぎした。
放火犯はカメラリアだ!!

カメラリアは火事が起こったときもみんなが居る大部屋に居なかった!!

タルケを使って火をつけたんだ!!

俺たちの家を返せ!! 孤児院を返せ!! 死んでしまった人たちを返せ!!

子供たちは完全にいきり立った様子でカメラリアを責め立てていた。カメラリアをかばっているはずの職員も本当にカメラリアが犯人ではないと言いきれるのかという疑念と迷いが感じられる。

どうやらカメラリアが無実であると思っっているのはフレイヤだけなのかもしれない。

「みんな、落ち着け!! 友達を疑うなんてよくないだろう?」

「でもこいつは!! こいつは火をつけたんだぞ!!」

「違う!! カメラリアが火をつけるはず無いじゃないか!!」

「フェノア様は知らないんだ!! カメラリアは、死を呼ぶ女なんだ!!」

空気が凍り付いた。

否。

凍り付いたのはカメラリアとその周囲の空気。彼女の放つ悲しみが空気を凍り付かせたように感じさせた。

尚も男の子はカメラリアを責め立てる。

「カメラリアっていう名前は死を連想させる名前なんだ!! カメラリアの家はカメラリアが生まれる前はお父さんとお母さん、それからヒラソルって言うお姉ちゃんが居たんだ。だけど、カメラリアが生まれるとお父さんもお母さんも死んじゃった!!」

「おい、やめろ!!」

「やだ!! ホントのこと言って何が悪いんだ!! その後カメラリアはヒラソルと一緒にこの孤児院へやってきた。ヒラソルはすごい明るい女の子だった。私の名前はひまわりを異国の言葉で言った言葉なのって楽しそうな笑顔で教えてくれた。それでカメラリアは椿って言う花からとった名前だって言ってた」

「止めろって言って――」

「でも、ヒラソルはその後すぐに死んじゃった。その直前まで元気だったのにカメラリアと2人で遊びに行った次の日に病気で死んじゃった。直前まであんなに元気だったのに!! あんなに笑顔だったのに!! それもきつとカメラリアのせいなんだ!! 椿は首落ちるっていわれてる不吉な花だから!! その椿から名前をとったカメラリアがヒラソルと2人で遊びに行ったから!! カメラリアのせいで色んな人が死んでいくんだ!!」

一瞬だった。

フェンが、フレイヤがその少年が大声で叫んだ言葉に気をとられているその一瞬の隙。

カメラリアはいつの間にか近くにあった小さな鉢植えを両腕で抱えていた。

そして、その男の子に駆け寄ると頭に勢いよく鉢植えをぶつける。

「キャーキャー!!」

職員達や子供たちの悲鳴。

少年は頭から血を流しその場に崩れ落ちた。

カメラリアはそのまま一目散に走り出して森の中へと走って逃げる。

「フェノア!! あなたはカメラリアをお願い!! 必ず連れ戻して!!」
「わかりました!!」

俺は慌ててカメラリアの後を追った。

もう姿は森の中に消えてしまっただけが見えないが子供の走るスピードならすぐに追いつけるはずだ。

「はあっはあっ……」

数分走り回るとカメラリアはすぐに見つかった。

森の中にある小さな池の側で佇んでいた。

フェンは息を整えながら話しかける。

「カメラリア……、こんなどこにいたのか……」

「来ないで」

「カメラリア？」

帰ってきたのは思いがけない拒絶の意志。

まだ10歳近くの少女とは思えない語気の強さだ。

「来ると、フェン兄ちゃんも死んじゃう」

「おまつ、さっきの子が言ってたこと気にしてんのか？ 考えすぎだ——」

「本当だもん！！ お父さんもお母さんも私が生まれてすぐに死んじゃった。それで私とお姉ちゃんは一緒にこの孤児院に来たの。だけど私はなかなかみんなと仲良くできなかった。おしゃべりが苦手だった。でも、お姉ちゃんはずぐにみんなと仲良くできてた」

「……」

カメラリアはこっちをむき直した。

また、いつか見せたような能面のような表情だった。

「お姉ちゃんがうらやましかった。すぐにみんなと仲良くできるお姉ちゃんがうらやましかった。ある日、お姉ちゃんと2人でこの森の中に散歩に来た。お姉ちゃんはいつともみたいに楽しそうに笑顔だった。笑ってた。うれしそうだった。だから、私は思った」

懺悔だったのかもしれない。

悔恨だったのかもしれない。

嘆きだったのかもしれない。

カメリアは尚も続けた。

「お姉ちゃんなんか死んじゃえ！！って。お姉ちゃんは向ヒラソル日葵なんて太陽みたいなお花の名前なのに私は椿カメリアなんて縁起の悪いお花の名前。お姉ちゃんばかりずるい！！お姉ちゃんなんか死んじゃえ！！って思った。そしたら次の日、お姉ちゃんは死んじゃった」

「カメリア……もういい……」

「今回の火事だってそうだもん！！孤児院にいるのはつまらなかった！！孤児院なんか燃えちゃって！！みんな死んじゃえ！！って思ったから火事になって死んじゃったの！！」

「もういいって！！」

「……私は死を呼ぶ女なの。私が暗い性格だから。私が椿カメリアなんていう名前だから。私の周りにいる人はみんな死んじゃうの。私が死んじゃって思った人たちは死んじゃうの」

カメリアは俯く。

儚く、今にも折れてしまいそうな身体。

風が吹けば飛ばされそうな、押されれば転がってしまいそうな。

フェンはカメリアに近づき頭を撫でながら言う。

「椿って花はな、昔から神聖な花として知られているんだ。邪気を

振り払い魔除けの力を持っていて吉祥模様っていうめでたい模様に使われたりもするんだ」

「……フェン兄ちゃん？」

「椿の葉は厚くて艶やかだから生命の象徴とも言われてる。花が首落ちるとも言われるように首からぽろっと落ちるのは神聖で真に美しいもののみが許される可憐で優雅な潔さだ」

「……」

「見ろよ」

「……え？」

フェンは無理矢理にカメラリアに池のふもとの木を見させる。

そこに咲いているのは凜と、優雅に咲く椿の花だ。

青々とした緑と鮮やかな赤のコントラスト。

カメラリアが息を呑む音が聞こえた。

「こんなに真っ直ぐに咲いてるじゃねえか。こんなに綺麗な花じゃねえか。春の訪れを告げる木、椿。椿の花は泣く子も守るほど優しく綺麗だって昔から唄われてる。花言葉は女性らしさと気取らない美しさ。大人しい（・・・）カメラリアにはぴったりの名前だろう？」

「うっ……えぐっ……」

カメラリアが泣き出し始めた。

「名前が、他人が、何だっていうんだ。確かに、お前の父さんも母さんも姉ちゃんも、死んじゃった。火事で孤児院も焼けちゃった。ひとりぼっちで辛いだろう。家族がいなくて寂しいだろう。それでも、お前は生きてるんだ。お前が迷った時には俺と一緒に道を探してやる。寂しい時には俺が話し相手になってやる。うれしい時には一緒に笑ってやる」

「えぐっ……ブエン兄ちゃん、フェン兄ちゃんは、じんじゃ、死ん

じゃ、わない？」

「ああ、俺は死なない。お前をひとりぼっちになんかさせないさ」

「約、約束だ、よ？」

「ああ、そうだ。俺は死なない。約束だ。ほら、小指立てろ。約束する時は指切りげんまんしなきゃいけないんだぞ？」

椿の花が、一つ池に。

青い水に流れる椿の赤い花。

沈みかかった陽は2人を赤く照らしていた。

第四章 トカゲを乗せた少年

フェンは孤児院で騒動が起こったその晩にフレイヤと2人で食事をしていた。

今回の食事を誘ったのはフェン。

フェンとしては今回の放火事件について話したいただけだったが、フレイヤは食事に誘われたことに心の高揚感を隠さない。

フェンは悪手を打ったことに後悔した。

「フレイヤ様、あの男の子はどうでしたか？」

「早速その話題なの？もう少し2人で甘〜いひとときでも楽しまない？」

「……それはまたの機会に」

「もう。せっかく誘ってくれたってのにつれないのね」

拗ねたように頬をふくらませるフレイヤ。

子供っぽい振る舞いだが、フレイヤがそれをするどこか小悪魔的な美しさがあった。

「……すみません」

「どーしてそこで謝るかなあ。もうちょっとオンナゴコロの勉強してよね!？」

「……すみません」

「しょうがないわね。あの子なら大丈夫よ。頭の何カ所を切っちゃったけど顔に傷跡は残らないそうよ」

「そうですか。それはよかった」

安堵のため息。

フェンは尚も続ける。

「あの、それでカメラリアについては……？」

あのあと、すっかり落ち着き自分を取り戻したカメラリアは今は一時的にとある職員が自宅に預かっている。

テントに戻すわけにも行かない為の臨時の措置だ。

「ええ。カメラリアなら大丈夫でしょ。あの子の目には光が戻っていたもの。それから、カメラリアにも処分はしないわ。あの男の子も言い過ぎたことを反省していたし、事実、カメラリアもひどく反省して居るみたいだしね」

「そうですか……それはよかったです」

安心して手元のビールを飲むフェン。

フレイヤはその様子を横目で見ながら微笑んで言う。

「今回はありがとうね、フェノア」

「え、ああ。何もしていませんよ」

「そう？ 『ああ、俺は死なない。お前をひとりぼっちになんかせないさ』 って熱く語ってたじゃない」

「ちょ、何で！？ 盗み聞きしてたんですか！？」

「盗み聞きとは失敬ね。私もあの後あなたたちの後を追ったら2人が良い感じに話していたから隠れて聞いていただけよ」

「それを盗み聞きと言うんです！！」

「そうなの？」

「はあ……。恥ずかしいんで忘れてください」

「嫌よ。あなたの言ってたあの言葉で私は今晚のイケナイ妄想をするんですから」

またビールを噴出した。

恒例化しつつあるマーライオン。

「ゴホツツツ、何を言うんですか？」

「何って、ナニも言って無いじゃない」

「いや、ですから!!」

「あら、それともフェンがとうとう私の相手をしてくれるの!?!? とうと決まったら早速私の家に――」

「行きません!!」

この数日で何度繰り返し返したかわからないおきまりのやりとり。すっかりそれてしまった話を本題に戻した。

「はあ……それでフレイヤ様。犯人の目星は付いたのですか？」

「うーん……ついたと言え、ついたのかもね」

「そうですか……ってえ!?!」

良い返事を期待していなかった分驚いてしまった。

「まだ、ぼんやりとだけどね」

「どういう事です？」

「……」

フレイヤは手元のカクテルを口に運び言いにくそうにしている。

フェンはフレイヤが再び口を開くのをじつくりと待った。

フレイヤは声を潜めて言う。

「……ストリボーグの間諜が紛れ込んでいるみたいなの」

「間諜がこの町に……?」

「ええ。ニーヌの居るヴァサムでもストリボーグ軍の不審な動きが確認されてる。もしかしたら今回の放火もそれと関係があるのか

もしれない、と言うのが私の考えよ」

「ですが、今回の放火は内部犯なのでは？」

「だから、そういうことよ」

少し目を伏せるフレイヤのその仕草でフェンは理解した。

孤児院の職員の中にストリボーグの息がかかった人間が混じっているのだろう。

だから、フレイヤはこのような気が滅入っているのだ。

「どうやって、見つけるのです？」

「……それを悩んでいるのよね」

息を吐き出すフレイヤ。グラスが空いていたので次のカクテルを頼んでいる。

「……ねえ、フェノアはどうしてカメリアが犯人じゃないって思ったの？」

「え？」

「私は、カメリアの性格を知っていたわ。あの子は虫も殺すことの出来ない、穏やかな性格をしている。そのせいか思い詰めることもあったけど、それでもカメリアが犯人じゃないことは私にはわかる。人を見る目には自信があるしね」

「……」

「でも、あなたはカメリアのことを知らないじゃない？ それなのにどうしてカメリアが犯人じゃないってそう信じていたのかなって疑問だったのよね？」

フレイヤは真剣な様子で尋ねてくる。

その表情からフェンはまじめに答えなければならぬことを理解し、慎重に言葉を選んで紡いだ。

「……フレイヤ様との食事に遅刻した日に、カメラリアと会ったんです。街中で1人で寂しそうに佇んでいました」

「そうだったの？」

「あのときのあいつ、何してたと思います？」

そこでしばし、間をとる。

フレイヤが続きを促した。

「何って……？」

「何も。何もしてなかったんです。ただ、行き交う人を眺める。ただ、街の喧噪に耳を傾ける。ただ、この世界に存在する」

「どういうこと？」

「……俺は、小さいときの記憶がありません。両親を知りません。家族を知りません。俺はファンデル様に拾われてから不安で一杯でした。不安で押しつぶされそうになったとき、俺も街中で1人、存在してたんです。誰か、助けてくれて」

真剣な告白に聞き入るフレイヤ。フェンの言葉は尚も続いた。

「ガキだったんですよ、どうしようもないくらいのがきだった。自分で道を作らず、誰かに連れて行ってもらうことを祈る」

「……」

「そう言うときの俺たちは誰かを失うことをひどく恐れる。帰る場所をなくしたくない。知っている人を失いたくない。これ以上ひとりぼっちになるともうどうすればいいのかわからなくなる。……矛盾してますよね。ひとりぼっちになるのは嫌なのに、街にひとりぼっちになりに行く。でもそうすることしかできなかった」

「……そう」

「あのとき、カメラリアを見たときに自分を見たような気がしたんで

す。ひとりぼっちになりたがってる。ひとりぼっちをいやがってる。そんな屈折した感情が俺にはわかったんです」

「……それで、カメラアが犯人じゃないって思ったのね」

「ええ。帰る場所はなくしたくないはずのあいつが放火なんて出来ない。あいつはペットとして飼っていたタルケすら失いたくなくなつたんですから」

フェンはひとしきりに言い終えると大きく息を吐き出した。すると、フレイヤが突如笑い声を上げた。

「ふふっ」

怪訝そうに尋ねるフェン。

「どうかしましたか？」

「いえ、何でもないわ、ふふっ」

「……？」

「良いの。それよりももう少し飲みましよう？せつなくなんだから」

¶

翌日。

難航していた放火事件の犯人捜しは思わぬ進展を見せた。

ニーヌの居る街、ヴァサームで間諜が取り押さえられたのだ。そして、そこから伝えられた情報で今回の犯人も見つかった。

犯人は孤児院で働いていた女性職員。

詳しく素性を洗ってみれば、元々はストリボーグの名家の家系らしく、過去の大戦でアナーヒタに訪れてからは代々アナーヒタの情報をストリボーグに流していたらしい。

今回の事件もストリボーグから渡されたとある新兵器を試してくれとの事でそれが暴発した末の火事だったようだ。

「まさか、犯人がもう死んでしまってるとは思いませんでしたね」「ええ、そうね。まあ、この件に関してはしょうがないわ。解決したと言うことでよしとしましょう」

そう、犯人は火事で死んでしまった職員の中の1人だったのだ。犯人としても思わぬ結果による火事だったのだろう。結局被疑者死亡という形で事件は幕引きを迎えた。はずだったのだが。

「まだ、終わってませんよ。事件は終わりましたが、カメラリアが立ち直らなければ終わってないんじゃないんですか？」

「それは、そうだけど……」

「ということで、乗りかかった船です。カメラリアの所へ行ってきましたよ」

「え?」

「カメラリアは昔の俺みたいな状態なんです。今度は俺がカメラリアを救ってやりますよ」

フレイヤは哑然とした表情でフェンを見送った。
フェンの唐突な行動に少し呆氣をとられていた。

「よう、カメラリア」

カメラリアは街中のとある施設で保護されている。

放火犯も判明したので、近いうちに公園でのテント場での生活に戻ることになっている。

ちなみに、カメラリアが傷つけてしまった男の子とはお互いに謝り、仲直りしたそうだ。

「フェン兄ちゃん!？」

「元氣そうだな。よかったぜ」

「うん」

カメラリアは穏やかな表情でフェンに笑顔を見せた。
少女らしい笑顔。

「ほら、お前の家族を連れてきてやったぞ」

「あ、トカゲさんだ!!」

「俺が世話してやってたんだから感謝しろよな……って聞いてないな」

カメラリアはフェンの話もそちのけにかごに入ったタルケに夢中である。

まあいいか、と言った気持ちでカメラリアを温かく見守るフェン。
頃合いを見計らってカメラリアに話しかけた。

「なあ、カメラリアは将来になりたいものってあるのか」

「え?」

頭と両肩にタルケを載せながら振り返るカメラリア。
吹き出しかけたが何とかこらえた。

「将来の夢は何だ?」

「私……? んと、笑わない?」

「ああ、笑わないさ」

カメリアは少し表情に影を落として言いにくそうにしている。
フェンがもう一度目だけで問いかけると渋々と答えた。

「んと、私は薬師になりたい。傷ついた人たちを助けるお薬を作る
薬師になりたい」

「薬師か……薬師になるのは大変だぞ？」

「うん……でも、がんばりたい……」

「そうか。がんばれよ。俺は応援してるからな」

発破をかけるフェン。

それでもまだカメリアの表情は晴れなかった。

その影が気になるフェンはもう一度目線でカメリアに問いかける。
カメリアは固い表情でフェンに尋ねかけた。

「ねえ、フェン兄ちゃんは死んじやわないよね」

「なんだ、まだ気にしてたのか？ 大丈夫だ、俺は死なないって」

フレイヤに茶化されたこのフレーズを再び繰り返すフェン。

カメリアは意を決したように言う。

「フェン兄ちゃん！！じゃあこのトカゲさんを一匹預かって！！」

「へ？」

「だから、トカゲさんを一緒にいてあげてほしいの……。フェン兄
ちゃんの言うことが本当なら椿は生命の象徴なんでしょ？」

「ああ、そう言ったけど……」

「でももしかしたら椿は^{カメリア}やっぱり縁起の悪いお花かもしれない。だ
から、フェン兄ちゃんが椿が^{カメリア}縁起の良いお花だって証明してよ！！」

「いや、だからといって何もおれがタルケを預かる理由になんか……」

…?」

「トカゲさんは私の家族だもん。だから、だから!!」

カメリアは駄々をこね始める。

フェンにはカメリアの言う言葉の意味がわかった。

カメリアはまだ不安に思っている。

やっぱり自分は死を呼ぶ女なのかもしれない。

フェンがカメリアのペットであるタルケをつれて死んだら、やっぱり自分は死を呼ぶ女だ。

だけど、フェンがタルケと一緒にいても死ななかったら、自分は死を呼ぶ女なんかじゃないのかもしれない。

だから、タルケと一緒にいてそして死なない約束を守ってくれとカメリアにとってこれは賭けなのだ。

「……よし、わかった!!じゃあ俺がその3匹のタルケの中で1匹だけ引き取ってやるよ」

「ホント!?一瞬だって離れちゃダメだよ!!お仕事の時も離れちゃダメだからね!!」

「それは……いや、うん、もちろんだ!!」

カメリアはようやく笑顔を見せた。

雲一つない澄み切った笑顔。

もう、カメリアは大丈夫だろう。

¶

カメリアのもとからの帰ると、フェンはフレイヤに全てを伝えに

フレイヤのもとへと向かった。

すると、フレイヤ達は慌ただしく部下たちに指示を飛ばしていた。フエンが声をかけると慌ててフエンのもとへと駆け寄る。

表情は厳しかった。

「フェノア！！ちょうど良かった——」

「どうかしたのですか！？」

「……」

フレイヤの動きが止まった。

その視線はフエンの頭の上。

真っ赤な髪の毛の上にはこれまた真っ赤なトカゲ——タルケがのっていた。

フエンはタルケを胸ポケットに入れようとしたのだが何度やってもタルケがポケットに入るのをいやがり頭の上によじ登ってくるのだ。

しょうがなく頭の上にのることを許可したフエン。

そんな顛末を知らないフレイヤは頭の上にトカゲを載せたフエンに言葉を失った。

目をこすってみてもやっぱりトカゲがのっている。

ゆっくりと言葉を発した。

「ええと、さっきヴァサームから——」

見なかったことにしたらしい。

ちなみにフエンは頭の上に載せたタルケが想像以上にフィットしていたため、頭の上にタルケがのっていることなど忘れていた。

そんな呑気なフエンはフレイヤが何に言葉を失っていたのか見当がつかず、顔に鼻くそでもついていただろうか、それとも鳥の糞でもついていたか、と見当外れな方向へと思考が行っていた。

「ゴホン、ヴァサームが攻め込まれたそうなの。この町に救援要請が来ているわ」

「ヴァサームが？」

「そう。相手はストリボーグ軍が500人ほど。一刻を争う事態よ」
「500！？何だって急にそんな大人数で！？」

「すぐに出発するわ。あなたも部下たちにすぐに出陣できるように指示を出してきて。それじゃね」

第五章 ヴァサーム防衛戦

「ゴホッゴホッ」

ニーヌは咳き込むと、口から血液混じりの赤い液体を吐き出した。だが、それで気分が晴れるわけではない。

次の敵兵の波がいつ訪れるかはわからないのだ。

今は、周囲に敵兵の気配はない。

ニーヌは自分の身体を改めて見直すと、思いの外多かった傷の数に眉間に皺を寄せた。

深い傷こそ無いものの、傷の数は多い。

出血も多いだろう。

ニーヌは近くにいた部下に声をかける。

その兵は息を切らしながら答える。

「南側で交戦中の部隊の状況は？」

「は、さき、先ほど、と、変わらない、と」

「援軍は？」

「アソールから、フレイヤ様と、フェノア様が」

部下の言葉にニーヌは形の整った眉をぴくりと動かす。

予想通りの名前だった。

援軍に来るのはフェンとフレイヤ。そんなことわかっていた。だからこそ、負けられない。

「――！！」

突如、ニーヌの背後から奇妙なうめき声が聞こえた。同時に背中に重みも感じる。

慌てて振り返ると先ほど援軍の到着状況を教えてくれた兵がこちらに倒れてきている。

彼は頭に矢を生やし、絶命していた。

ニーヌは慌ててその場を離れると、矢の飛んできた方向に目を凝らす。砂埃で視界が悪い以上、敵の存在は確認できなかった。

「はぁ……」

ニーヌは深くため息をつく。木の陰に隠れる。

目を閉じ、深く深呼吸。

緑色の全身に、魚の下半身。

赤く上がった鼻と、小さな目。大きく裂けるような口元からはうつすらと牙がのぞいている。

醜い顔に逞しい身体の上半身。どこことなく感じられる力強さ。

メローと呼ばれる男の人魚だ。

メローはニーヌの身体に入り込むように溶けて消えていく。

魔術は特性上大きく二分される。

一つ目のタイプは物体に干渉し、物体自体を攻撃手段とするタイプ。このタイプは従える精霊のタイプによって得意とする魔術が異なる。

もう一つのタイプは精霊と意識を分かち合い——融合とよばれる——身体能力を向上させるタイプ。このタイプの術者は扱う精霊特有の能力を幾分か共有することが出来る。

ニーヌは先ほど矢の飛んできた方向にもう一度目を凝らしてみた。メローは人魚だが、気配を察する能力や視力に優れている。そのメローと融合したニーヌは今度は容易に状況を確認できた。見えてきたのは交戦中の自軍の部隊と敵軍。先ほど飛んできた矢は流れ弾——もとい、流れ矢——だったらしい。

ニーヌはまた一つ息をつく、融合状態を解き、交戦中の自軍の援護に向かった。

そして、力一杯走り、草むらから姿を現すと目の前の敵兵に思いのままに斬りかかり一刀両断した。斬られた兵は自らの身に起こった現象を理解する間もなく絶命する。

ニーヌは辺りの兵たちに大声を張り上げて鼓舞させた。

「みんな、ここが正念場よ！！ストリボーグの狗たちなんてズタズタに切り裂いてやりなさい！！」

ニーヌの鼓舞に兵たちは雄叫びを上げるように応え、兵たちの士気は上昇した。

ニーヌは難なく敵兵を斬ると、相手軍の中心に飛び込み、ガムシヤラに剣を振った。

■

ニーヌが戦場で奮闘している一方。援軍に向かったはずのフェンとフレイヤたちは思わぬ足止めを食らっていた。

「まったく何だってこんな好戦的なんだよ!!」

フエン達は道すがらに思わぬ種族からの攻撃を受けていたのだ。
ワーウルフ
狼人間

人と狼とで姿を変えられる種族で普段は森の中で暮らしている。

「クケケ、何ダお前、変ダな。オ前、頭にトカゲ乗せてる」

「うるっせえな。お前らのしゃべり方の方が変だろうが」

傍目には頭にトカゲを乗せ続けるフエンも十分に変な事実は棚上げするフエン。

周囲にはワーウルフの群れ。

容易には突破出来なさそうだ。

鋭い牙や爪で襲いかかるワーウルフに剣や魔術で応戦するフエンたち。

時間をかければ何とかかなりそうだが、時間をかけるわけにはいかなかった。

ジレンマ。

その思いはフレイヤも同様だったらしく、数で押してくるワーウルフの群れに苛立たしげだった。

フエンは剣を振りながらフレイヤのもとへと駆け寄った。

「フレイヤ様!! らちがあきません!! 先に行ってください」
「フエノア!?!」

フレイヤはフエンの顔を一瞥するとまた目の前のワーウルフの群れに視線をやる。

フレイヤの近くから氷の弾丸が放たれ数匹のワーウルフが犠牲に

なる。

フェンはフレイヤと背中合わせになると端的に言葉を述べた

「俺の部隊がこいつらを食い止めてます。フレイヤ様達は先にヴァ
サームへ向かってください!!」

「フェノア!? でも危険じゃー!?」

フェンの背中から焦ったような声が聞こえる。

フェンは目の前に居るワーウルフを思い切り蹴り飛ばすと言葉を
続けた。

「大丈夫です!! それにこのままじゃ援軍が着くのが後れてしま
う!! 良いから先に行ってください!! カメリアにも約束したんだ、
俺はまだ死にません!!」

「……わかったわ。フェノア、気をつけてね!!」

その言葉でフェンとフレイヤは散り散りに別れる。

フレイヤは部下たちに、フェンは自分の部隊に、今のいきさつを
伝えた。

フレイヤがフェンの目を見る。

フェンがフレイヤの目を見る。

フェンがしっかりと頷き顔に笑顔を浮かべる。

フレイヤは安心したように馬にまたがり最小限の敵だけ追い払う
と駆けだしていった。

後を追おうとする物達はフェン達がその後を追わせない。

数分後、その場に残されたのはフェンの部隊総勢10名と周囲を
囲む大量のワーウルフだった。

「クケ、お前う、見捨てられタ。クケケ、俺タチ、お前う食ベル。オ前、頭にトカゲ乗せてるから、クケケ、ソレデ火ヲつけて燃ヤシて食ベル」

「だゝクケクケうつせーな！！にわたりの出来損ないみたいな泣き声でわらってんじゃねえよ！！」

フェンはそう強がるが、事態は意外と深刻だった。
フェンはまだしも他の部下たちは負傷している者が多い。

「フェノア様、打開策があるんですか！？」

「んにゃ」

「おお、じゃあ――」

「どうしようかねえ」

耳を疑う部下の男の兵。

そんなんっ、といったような絶望の表情でフェンを見詰める。
その部下にフェンが話しかける

「なあ、お前。実は隠された力がある、とか言わない」

「はい！？」

「いや、実はお前が身分を隠してこの国で暮らすストリボーグの国王の息子、とか、実は異世界からやってきてこの世界では並外れた筋力なんです、とか」

「何言ってるんですっ！？」

「そんなわけないよねー」

茶々を入れる他の女性兵。

「フェノア様、私実は――」

「お！？なんだなんだ！？どこの国のおてんばお姫様だ、お前は！

？」

「実はオンナノコの日の2日目なのでかなりおなかが痛くて」

「そうか、でも妊娠してなくて良かったじゃないか」

「ええ。あの時、フェノア様があんなことするから妊娠してたらどうしてもらおうかと」

「そうだな、あのときの俺はどうしてたんだ。でもあれはお前がいきなりろうそくを使ったプレイヤー——」

「ちょっと!! 何言ってるんですか!!」

耐えきれずに突っ込む兵。

ジト目でフェンと女性兵に睨まれたために悪いことをしたような気がするが、何も悪いことはしていない。

「はあゝせっかく現実逃避してたのによお」

「全くです。早い男は嫌われるわよ？」

「何の話ですか!!」

ちなみにここは戦場。

3人がすったもんだをしている間は他の兵たちが死にものぐるいでカバーしている。

それでも尚も続くすったもんだ。

「んゝ、それにしても、どうしようかねえ」

「フェノア様も頭にタルケを乗せてるんだから何とかしてくださいよ!!」

「はあ!?! タルケを頭に乗つけてることに何が関係あるんだよ!?!」
「そうよ!! それにフェノア様が頭にタルケを乗せてるのは単なるオシヤレなんかじゃなくて複雑な事情があるのよ!?!」

「その通りだ!!」

「だから、あなたみたいは何の秘密も持っていないはな垂れ小僧とは

違うのよ!？」

「ちよっと待ってください!!! 何で僕がせめられなきゃいけない——
ってあれ？」

3人が夢中になってる間に周りのワーウルフ達はいなくなっていた。
た。

気付いてみると、辺りには様々なところで炎が燃えている。

「やべっ……やり過ぎたか。おい、急いで消火しろ!!! 燃え広がったら厄介だ!!!」

「了解!!!」

あちらこちらから聞こえてくる部下たちの返事。

さきほどまでフェンと会話していた女性兵も急いで消火活動に移るが、一方の男性兵はまだ現状をつかめていなかった。

「フェノア様……いつの間に魔術を……!？」

「ん? ああお前達と喋ってる間にな。ワーウルフは炎が苦手なんだ」

「!?! それを知っているならフレイヤ様たちを先に行かせなくても
すぐにこいつらを追い払えたのでは!？」

「んゝそうしても良かったんだが、そうすると味方兵の犠牲が増える
からよ。いくらおれでも10人ぐらいしか動きは把握できない。

いいから、お前も火を消せ」

フェンはそれだけ言うとは他の兵のもとへ行く。

男性兵は自分の部隊の隊長の力を改めて感じた。

ニーヌは既に疲労困憊だった。
剣を持つことすらかなりの重労働。
激戦地・ヴァサーム。

今まで多くの人間がこの街で戦死したと言う事実がニーヌの頭に
よぎる。

「はぁ……。負けたく、無い……」

それでもニーヌは剣をおかない。身体を休めない。
新たな敵の姿を見つけると躊躇いもなくその命を刈り取る。
死にそうな仲間がいれば救護隊に救命を命じる。

水色の髪をなびかせながら長い剣で戦うその姿は死神のように見
えた。

「ニーヌ!!」

その声で振り向く。

視界に入ってきたのは金髪的女性。
姉のフレイヤだった。

「姉様……」

「ニーヌ、ひどい怪我じゃない!! 大丈夫なの!？」

「ええ……私は大丈夫……」

「何言ってるのよ、あなた顔真っ青——」

「良いから。大丈夫だから。姉様は南側の方をお願い。私はこっち
のほうの防衛にあたるから」

「ニーヌ？」

「じゃあ、お願い」

ニーヌはフレイヤの制止も振り切ると、駆けだした。

左手にはしっかりと剣を握り、敵兵に斬りかかる。

フレイヤはその背中を呆然と見送っていたが、気を切り替えて部下たちに指示を飛ばした。

ニーヌがああ言う以上、フレイヤとしてもその指示に従うしかない。

話はこの戦が終わってからでも何とかなる。

ニーヌを、妹を死なせはしない。

「みんな、南側へ向かうわよ！！ストリボーグ軍なんて木っ端微塵にしてやりなさい！！」

フレイヤのその言葉を聞いてストリボーグへ向かうフレイヤの部隊。

フレイヤは弓を持つ自分の手に力を込めた。

フレイヤ・イドは剣士ではない。

弓とそれと組み合わせた魔術を中心に戦う中距離型の兵である。並外れた弓矢の制度と圧倒的魔力で多くの軍功を残してきた。特に、その魔術の才に関しては天才と謳われる。

フレイヤは走りながら精霊を呼び出す。

セイレーン。

フレイヤと同じ色の長い金髪。

女性の象徴の胸のふくらみは貝殻にて隠されていて、下半身は魚の鱗。

美しい女性の人魚だ。

セイレーンは一瞬フレイヤの背後に現れたかと思えばすぐに姿を

消してしまった。

フレイヤは尚も走りながら弓に矢をつがえ、引き絞る。

そして、その矢を放つと同時に魔術を発動した。

放たれた矢はどんどん大きくなり、氷の刃を身に纏っていく。

そして、それが敵兵に届く頃には2mはあろうかという大きさの凶器になっていた。

フレイヤは次々に同様の矢を放っていく。

フレイヤに近づき直接攻撃せんとする兵はフレイヤの部下たちがそれを未然に防ぐ。

フレイヤの部隊のおきまりの陣形だった。

フレイヤが到着してから30分ほど遅れてフェンはヴァサームへ到着した。

状況を聞くや否やニーヌの防衛する北の方面へ援護に向かう。

そこにニーヌの姿はあった。

水色の髪は大量の血を浴びたのか赤く斑点状になっている。

「ニーヌ!!」

「遅い。もう戦は終わるわ。それに何なの？頭の上にタルケなんて乗せて。流行らないわよ、そんなファッション」

ニーヌは一息に言い放つ。

周りには敵国ストリボーグの兵たちの骸の山。
周囲からは敵兵の気配もあまり感じなかった。

「……このタルケは色々と事情があるんだって。それに俺だって遅れたくて遅れたんじゃないやねえっての」

「どうかしら」

ニーヌはため息をつきながら剣を鞘に収めた。

腰に手をつき大きく息を吐く。

フェンはそんなニーヌの様子を見てポケットから何かを取り出した。

「ほれ、ニーヌ。これでも飲め」

「……？なに、これ？」

「気付け薬だ。アイツヴェンの薬師の特別製。少しは楽になるぞ」

「……知らないわよ、こんなの」

「良いから飲めって。顔色悪いぞ？」

「……わかったわよ」

渋々渡された薬を飲むニーヌ。

常ならばもう少し抵抗するのだが、身体の調子が悪いのも事実。素直にフェンの好意に甘えた。

「それにしても、良く守りきったな。ストリボーグの人数はこっちの倍近かったんじゃないやねえのか」

「……かもね」

「いや、ホントすげえって」

「あんたとは出来が違うの」

「んなこたあ知ってるよ。俺じゃ正直無理だったんじゃないやねえか」

素直に漏らすフェンの言葉にニーヌは目をやや白黒させる。

ニーヌのそんな様子にフェンも気づき、怪訝そうに眉を寄せた。

「……なんだよ？」

「あ、いや、随分あっさりと認めるのね」

「事実なんだからしょうがねえだろ。訓練でも俺はニーヌに一回も勝ったことないしな」

「男のプライドとか、ないの？」

「ん？プライド？そんなもん持ってたら女のニーヌに剣術をおそわらねえだろ？」

尚も淡々と言葉を続けるフェン。

フェンは周囲の様子を確認しに手近の木に登って行ってしまった。

——全く……この男は変なことばかり……

ニーヌが嘆息していると周囲の状況が一変した。

心の芯を震わすような、金切り声。

周囲から鳥たちが一斉に飛び立つ音がする。

「今の音、何!!」

「わからん、行くしかねえだろ!!」

木から飛び降りてきたフェンは慌てたように言う。

そして、一目散に駆けだし、ニーヌも急いでその方向、とは逆の方向に駆けだした。

「バカ!! どんな耳してたらそっちから聞こえてくるのよ!! そっちは街の方向!!」

「なに!!? さっさと見えよ!! 俺は方向音痴なんだ!!」

「知らないわよそんなこと!!」

慌ててUターンするフェン。
ニーヌの背中では少し遠くなっていた。

▼

フェンとニーヌが到着した頃（正確にはフェンは道を間違えた分少し遅れた）、2人の目に入ったのは文字通りの化け物だった。

一見すると人。

だが、成人の男数人分はあろうかというずんぐりした巨体と体中に纏わり付かせた水草。

巨大な金切り声を発しながら、巨体に似合わない素早い動作で傍若無人に暴れ回っていた。

フェンは近くにいた兵に尋ねる。

「おい、お前……どうなって——ってお前どこで見たことあるよ
うな……？」

「あなたの直属の部下です、フェノア様！」

そう言われて思い出す。

ワーウルフに襲撃されたときに、からかっていた兵だ。

「ああ、確かえーと、シータだっけ」

「タイシです……！」

いまにも崩壊の呪文を唱えそうな少女の名前を呼ぶフェン。

「それで、タイシ。何があった？」

「わかりません。この辺りにいたストリボーグ兵がさーっと退却したと思ったらあの怪物がこっちに――」

「危ない!!」

フェンとタイシは突き飛ばされた。

先ほどまで2人が居た辺りに大きな丸太が飛んでくる。

「すまない。えーと、お前は――」

「エミリーです、フェノア様」

2人を助けたのはこれまたフェンの部下の先ほどの女性兵。

2人を突き飛ばし、自分も間一髪のところでは化け物の攻撃を避けた。

フェンは改めて周囲の状況を確認する。

タイシとエミリー以外に生きている人間は居ない。

下を見れば見覚えのある部下たちの無残な姿。

「おい、他の奴等はもう死んじゃったのか？」

「ええ。あの化け物が現れてから瞬く間に」

「……クソッ。少し下がって助かりそうな人間をここから離して、それから援護を呼んでくれ」

フェンはそう言い残し、既に怪物と交戦を始めているニーヌの援護に向かった。

いくら何でも2人じゃ無謀すぎる!!

そう言いかけた、タイシの言葉はエミリーに遮られ、仕方なく2人はフェンの指示に従った。

フェンはニーヌの援護に向かうと魔術を中心に攻撃を始めた。

ニーヌの華麗な剣術をカバーする。

だが、すぐにわかった。

このままでは危険だ。自分たちはこの怪物には勝てない。
今は五分五分かもしれない。

でも、数分後には状況は悪化するだろう。
消耗戦になったら敗勢となるのは明らかだった。

「危ない!!」

フェンが頭の中で現状を分析していると、ニーヌの声で意識を引き戻された。

我に返ると目の前にドラウグの蹴りが迫っている。

避けようとするが、間に合わない。

フェンは勢いよく吹き飛ばされた。

「つああ!!」

背中をしたたかに地面に打ち付け、口から血を吐き出すフェン。

ニーヌが慌てて近くに寄ってきた。

「バツカ、油断しないでよ。大丈夫?」

「……バカヤロ、俺はおまえみたいに剣術に長けてないんだから仕方ないだろ」

「ふん、口答えする余裕があるなら大丈夫ね」

ニーヌはフェンが返事をするたびに、また怪物のもとへと向かう。

フェンも痛む身体を無視して慌てて立ち上がると、再び剣を構えた。

いくらニーヌでもあんな怪物を1人で相手するのはしんどい。
走り出そうとしたフェンの背中に声が駆けられた。

「フェノア様!! 僕も手伝います!!」

タイシだった。

聞けば、エミリーに止められたにもかかわらず指示を無視してこちらに戻ってきたのだという。

援護を呼ぶという役目はエミリーに任せて。

「おまっバカヤロウ!! 何で戻ってきた!!」

「仲間たちが死んでしまったのにじっとなんかしてられません!!」

「おま……クソッ……!!」

フェンはタイシを再び罵倒しようかと思ったが声をかけられなかった。

援護を呼ぶという役目はエミリーがやっているのだ。責める筋合いは薄い。それならタイシがここに居る以上タイシにも手伝わせた方がマシだろう。

「お前、魔術の型は!？」

「水の融合型です!!」

「よし、上等だ。それならニーヌと一度交代してきてくれ!! 10秒時間を稼げば十分だ!!」

「了解しました!!」

そう言っ て精霊を呼び出しながら融合するタイシ。

タイシの精霊はトラロックと呼ばれる雨の精霊。

そのトラロックと融合したタイシは全体的な身体能力の底上げがなされる。

「ニーヌ!! 一度俺の所に来てくれ、作戦がある!!」

ニーヌはフェンの声を合図に一度怪物から離れる。

その間の怪物の応対はタイシがつとめる。

押されてはいるが数十秒なら持つだろう。

「はあっ……はあっ……、さ、作戦?」

息も絶え絶えなニーヌ。

フェンは端的に言葉を述べた。

「前にファンデル様からあの怪物のことを教わったことがあるの
思い出した。あの怪物の名前はドラウグ」

「どら、うぐ……?」

「ああ。ドラウグを倒すには首を切り落としてその傷口を焼くしか
ないそうだ」

「……そんな、大事なこと、さきに、言ってよね」

「るっせえな。吹っ飛ばされた衝撃で思い出したんだよ」

「……ふん、これだからバカは、嫌なのよ」

毒を吐くニーヌだが顔色は悪い。

短期決戦の必要性があるだろう。

「火なら俺の出番だ、行くぞ——ってまた俺のこと無視かよ!!」

ニーヌは既にドラウグの方へ駆け出していた。

フェンも慌ててその後を追う。

ウエスタ

フェンの従える精霊だ。

身体に深紅の布を貼り付けただけというきわどい格好をした美しい女性の姿。炉の女神とも呼ばれている。

フェンはウエスタを呼び出すと自らの持つ剣に炎を纏わせた。

「熱っっっ！！こんなそんな長く持つてられねえぞ……」

ブツブツと言いながらドラウグに斬りかかるフェン。

タイシも奮闘しており、ニーヌとタイシ、それから3人でドラウグに攻撃を始めた。

ドラウグが力任せに両腕を振り払う。

ニーヌとタイシがそれを避ける。

その隙にフェンが思い切り一閃する。

「ギイイイイイイイアアア！！！」

再び耳をつんざくドラウグの金切り声。

攻撃の効果があつたようだ。

ドラウグは炎の剣で斬りつけられた痛みからだろうか力任せに突進してきた。

ニーヌの方向だった。

いつものニーヌなら避けることが出来たはずだった。

だが、その時のニーヌは大量の血を流し、ずっと戦場の最前線で剣を振るい続けてきていた。

体力の限界だった。

ニーヌは慌てて避けるが間に合わない。

目を覆いたくなる瞬間

「うがああああっ」

吹き飛ばされたのはタイシだった。

タイシがニーヌをかばったのだ。

代償にタイシは大きく吹き飛ばされる。

ニーヌも直撃は免れたものの、衝撃で倒れている。

「おい！！ニーヌ！！タイシ！！」

声をかけるも返事はない。

ドラウグと相対しながら盗み見ても2人とも、ピクリとも動かなかった。

ニーヌはうつぶせに横になったまま、タイシは木にもたれかかり頭から血を流している。

タイシの方は致命傷かもしれない。

3人が1人になってしまいフェンは防戦一方となる。

蹴り飛ばされる。

体当たりを受ける。

突き飛ばされる。

流れた出血で片目が見えない。

それでも唯一の希望となった炎の剣を手から離すわけにはいいかない。

炎を纏った剣で攻撃するしかこいつに勝つすべはないのだ。

フェンが気力を振り絞り、剣を振るうも、ドラウグはジャンプし距離をとる。

機敏なドラウグに攻撃を当てるのは困難に思えた。

「はあ……はあ……、くそつ、どうしろってんだよ……」

弱音が漏れる。

それでも負けられなかった。

フェンは再び炎の剣で斬りかかった。

ガムシヤラに。

だが、攻撃は空を斬る。

魔力も限界が近く、これ以上自分の持つ剣に炎を纏わせるのは辛かった。

そんな、一瞬の隙を突かれフェンはドラウグに首を捕まれた。そして、そのまま首を絞められる。

「グッ……うがあああああ」

手から剣が滑り落ちる。

目の前にはドラウグの凶暴な牙。

視界がブラックアウトする。

最期を覚悟した。

その時耳に奇妙な鳴き声が聞こえた。

キューー、と言う鳴き声。

ああ、そうか。これはタルケの鳴き声だ。

俺の頭の上ののってるんだった。

こんだけ派手に暴れ回って良く落ちなかったな。

カメラリアのタルケだ。

フェンの脳裏にカメラリアの顔が浮かぶ。

能面のように無表情な顔。

寂しく泣きじゃくる顔。

不器用に笑った顔。

俺が死んだら、カメラはまた塞ぎ込むだろう。

カメラは、また泣きじゃくるだろう。

そんなのは——嫌だ!!

フェンは再び最後の気力を振り絞りもがく。

自らの首を絞めるドラウグの手をつかむと、今にも途絶えそうな意識で魔術を紡いだ。

フェンがドラウグの腕に炎を当てると、絞められていた首は解放され、地面に振り落とされる。

そして、その直後ドラウグの巨大な金切り声が辺りを支配する。

「ゴホッ、ウオッホッ……ハア、ハア……」

フェンがドラウグを見ると、ドラウグの顔面に矢が刺さっていた。氷の矢。

慌てて後ろを見ると、遠くの方で矢を引き絞りながらこちらに走っているフレイヤの姿が見えた。

その傍らにはエミリーの姿も見える。

フレイヤが再び矢を放った。直後、再びドラウグが巨大な金切り声を放つ。

フェンは先ほど落とした剣を慌てて持ち直し、ドラウグに向き直った。

ドラウグは顔面、そして身体に刺さった矢と氷のつぶてをとろうともがいていた。

——チャンスだ

「どりゃあああああああああ！！」

どさり。

そう音を立ててドラウグの首は落ちた。

フェンはその首の切り口を魔術で焼くと、意識を手放した。

第六章 凶報

ヴァサーム戦から数日が経過したある日。

医療室独特の薬品の匂いが充満する部屋でニーヌは目を覚ました。辺り一面は真っ白。ニーヌは何度か瞬きをするがうまく思考は働かない。

焦点の合っていない目でぼんやりとしている。

ニーヌはヴァサームの市街の兵舎の医務室に運ばれていた。アナーヒタの王都アイツヴェン程の医療設備は整っていないが、一般市民の受ける治療よりは格段にレベルの高い治療を受けることが出来る。

そこに見慣れた金髪の女性、フレイヤが部屋に入ってきた。

「ニーヌ、目を覚ましたのね。調子はどう？」

調子？言っている言葉の意味がよくわからない。

ニーヌは未だ覚醒しない頭でひとまず起き上がり状況を把握することにした。だが、起き上がると、体中に痛みが走る。腹部、背中。自分の身体を見てみると包帯でぐるぐる巻きになっていた。

ニーヌはぼんやりと記憶を探ると朧気ながら記憶の輪郭が見えてきた。

ストリボーグ軍、フレイヤ姉様とフェン

そして見たこともないような巨大で海草をまとわりつかせた怪物が――

「ここはどこ！？ 戦はどうなったの？」

ニーヌはまだ痛む頭を振りきって慌ててフレイヤに状況を聞いた

だす。

「落ち着いて。戦には勝ったし、ストリボーグ軍は撤退したわ。それよりも具合はどう？」

「ええ、大丈夫みたい」

ニーヌはフレイヤの言葉にひとまず安堵すると、もう一度横になった。

起き上がった姿勢を維持することすら体力的に辛かった。

「ドラウグは退治したわ。フェノアが何とか最後に頭を切り落としてくれたの」

「……そう」

「よく、それだけの怪我で済んだわね。ニーヌもフェノアもスゴイと思うわ」

「お世辞はやめてよ、姉様」

姉様の方が私よりも軍功が優れていることも、実力があることも周知の事実だろうに。

ニーヌは、沸々と嫉妬のような感情が広がっているのに気づいた。嫉妬のような感情というより完全な嫉妬心かもしれない。

迷宮に入りそうな思考を振り払うためにニーヌは話題を変更した。

「姉様、フェンは大丈夫なの？」

「ええ。フェノアもしばらく意識を失ってここに収容してたんだけど、すぐに意識を取り戻したわ。目立った外傷もないみたいね」

「そうなんだ……」

「ニーヌによりしく伝えてくれって言ってたわ。それからあんまり無理するなよって」

「……？伝えてくれなくてもうヴァサームには居ないの？」

「ええ。今朝方にアイツヴェンに向かったわ」

「アイツヴェンに？」

「アイツヴェンから通信があったの。ファンデル様が任務で負傷して、療養中だからって至急戻って来いって」

「そう、ありがとう……」

「まあ、ひとまず休んでいてちょうだい。あなたが完全に回復するまでは私もこの町に滞在することになったの。それじゃ、また後でね」

「ええ」

フレイヤはそう言うのと部屋を出て行った。

ニーヌは、胸の辺りまでかけられていたシーツを頭の上まであげる。

あふれてくる涙を抑えることもせず、ニーヌは流れる涙をそのままにした。その水滴は目尻から重力に従って、一滴、一滴流れ落ちる。

ヴァサームを守れて良かった。

出来れば他の人の力を借りたくなかった。

自らの中の屈折した感情がうまく整理できなかった。

¶

フェンやニーヌ達がヴァサームで交戦中であつたとき、ファンデル・ニクスはある任務の最中であつた。

現女王アイシャ・ラクスによる極秘の任務。任務にはファンデルとラディックスの2人が赴いていた。

ラディックスはかつてファンデルの部隊に所属していたファンデルの元部下だった。

「今じゃ君も大隊長、か」

「はい、いつのまにか人の上に立ち、多くの命を預かる立場です」

大隊長、ラディックス。

軍の中では出世頭として名を馳せていた。

「立場が変われば見えてくるものも変わる。見える物が変われば中身を変えたいくなる。ヒトとはそう言うものだ。まあ、ラディックスならば心配ないだろう。お前にはこの国を背負っていつてもらわなければならぬ」

「はあ、だと良いんですが……」

「返事の切れが悪いな、どうかしたのか？」

「あ、そうでしょうか？今朝のウンコの切れが悪かったせいですかね」

ラディックスの言葉に笑うファンデル。かつての隊長だったファンデルとの2人の任務にラディックスは懐かしさを感じていた。

不意に、それまで笑顔だったファンデルの顔が真剣なものに変わった。ファンデルの様子の変化にラディックスもファンデルの視線の先を追う。

「それにしても、ひどい……」

「ああ。全くだ」

現在、ファンデルとラディックスはアイツヴェンの北西の海岸の

異常事態の調査に訪れていた。

激減した漁獲量。

激増した動物の死体。

波打ち際には水鳥やラッコなどの死骸が多数打ち寄せられていた。

「なんでこんな事に……」

この海岸はいつもは波も穏やかで、野鳥が飛び交いや時折海水浴に訪れる人もいた。

海抜の低いアイツヴェンの町並みを流れる川が合流して注ぐこの海岸はアイツヴェンの市民達の癒しのスポットでもあったのだ。

それが今現在目に入ってくるこの海岸の様子はそれとは大きく様子が違う。

「君は今回の任務について詳しくは聞いていないのだったな」

「ええ。詳しくはファンデル様から説明があるだろう、とアイシャ様から承っていましたので」

現在のアナーヒタの王はアイシャ・ラクスである。

王制を敷くアナーヒタではこのように女王が現れるのも希ではない。

「そうか……。ふむ、今回の任務は知っての通り、この海岸の異変に発端がある」

淡々と説明を始めたファンデルにラディックスは黙って耳を寄せた。ラディックスはファンデルのように自然界に造詣が深くはない。いつになく真剣な様子のファンデルの言葉を一言も聞き漏らさないようにしっかりと耳を傾けた。

「動物の死体が打ち上げられるようになったのと同じ頃から目撃情報があがっているのだ。海の底の方で何か巨大な生物の影のようなものが見えた、と」

「影、ですか」

ラディックスが何気なく漏らした言葉にファンデルは頷き、言葉が続ける。

「ああ、そうだ。その影は、おそらく海の主ではないかと思うがな。実際にそれを確認するために視察に来たのだよ」

「ファンデル様、そのクラーケンというのは何でしょうか？」

「ああ、すまない。クラーケンというのは、そうだな巨大な蛸のような魔物だな。海蜘蛛とでも言うべきか、とにかくこの辺りの海の主といえる存在の魔物だ。漁船なんかはクラーケンにかかれればひとたまりもないと言われている」

「はあ……」

ファンデルは言葉で説明しながら身体をうねうねと蛸のようにならしながら表現する。

ラディックスはファンデルのそのおかしな動きに吹き出しつつも、頭の中で巨大な蜘蛛と巨大な蛸を合わせて2で割ったものを想像し、若干身震いする。

ファンデルの部隊に所属していたときに様々な野生の生物を見たことは多いが、中には夢に出てきそうに対面を辟易とするような資格好の生物も多かった。

クラーケンがその類の資格好でないことをラディックスは願った。

「それで、ファンデル様はその巨大な影がクラーケンである可能性が高い、と考えておられるのですね？」

「その通りだ。もう一つ、考えなくはない予想もあるのだが、こち

らに関しては気にしなくて良いだろう」
「？」

ファンデルの歯切れの悪い言い方に文字通り首を掲げるラディックス。

「ファンデル様にしては歯切れの悪い言い方ですね。ファンデル様も今朝のウンコのキレが悪かったのです？」

「ああ、最近少し下痢気味でな」

「それは、ある意味切れが良いのではないですか？」

「そうか？でも、こう、キュツとこう力を入れたときに……と、こんな話をしている場合ではない。ラディックス、少し分担して調べよう。何か変なものを見つけたら私に教えてくれ」

ファンデルのその言葉に従い、ラディックスとファンデルは2人で分担して海岸を調査し始めた。

分担して調査を初めて1時間程度経った頃。

ラディックスはふと空を見上げた。

変わらずに輝く太陽。青い空を時折流れる雲がどこか清々しい。

そんななか、ラディックスは見慣れない鳥が空を飛んでいることに気付いた。

鮮やかな黄色の巨大な鳥。ラディックスは何気なくその鳥を目で追う。

その鳥はゆっくりと高度を下げると、海の方へと向かい、そして水中へとその姿を消す。

何の鳥だろう？ ラディックスがそんな疑問を頭の中に浮かべて

いると、その鳥は再び水中から姿を現す。

今度は一羽ではなく数羽。そして、その鳥たちは飛んでいき、そのスピードを上げていく。

そして、向かう先には――

「ファンデル様!!」

ラディックスは走った。ファンデルはしゃがんで何かを見つめており、背後に迫っている巨大な鳥には気づいていない。

間に合わない――!!

すんでの所で気付いたファンデルは慌てて鳥の攻撃を避ける。

一羽目の攻撃はそれで避けることが出来たのだが、続いて飛んでくる2羽目、3羽目の攻撃は避けることが出来なかった。

「ファンデル様!! 大丈夫ですか!？」

「……あ、ああ」

ファンデルは言葉を返すがその言葉に力はない。

ラディックスがファンデルの傷を確認するが、その深さに眉をしかめる。出血も多い。

「ファンデル様、しっかりしてください!!」

「うろ……こそ」

「喋らないでください!!」

慌てて持っていた布を当てて止血するラディックス。

ファンデルが何事か喋ろうとするのを制するが尚もファンデルはしゃべり続けた。

「うろ……こを……ヨルム……」

うろこ？ 鱗？

ラディックスはファンデルが必死の形相で自分に伝えてくる情報を何とか摘み取ろうと辺りを見回す。

先ほどまでファンデルが見ていた辺りに落ちていたのは人の顔ほどはあろうかという巨大な鱗。

ラディックスはひとまずそれを自分の荷物に入れるとファンデルの担当に集中した。

▼

フェンはアイツヴェンに戻るとすぐにファンデルが収容されている施設へと向かった。

王宮内の特別医療施設。

陽もどっぷりと暮れて人気の薄いその施設にフェンが駆けつけると、そこで不安げな表情のティアに出会った。

ティア・ニクス

ファンデルの実の娘で、フェンとは義兄妹の間柄である。

「フェン兄!!」

ティアはフェンの姿を認めると、フェンに駆け寄り抱きついてきた。

フェンの胸の中で震えるティア。父親譲りの綺麗な銀髪を優しく

撫でて落ち着かせる。

ティアはフェンの胸の中で静かに泣き始めた。

フェンは先ほどまでティアの座っていた長いすに座っているもう1人の人物に目配せすると、ティアを落ち着かせるためにいったん近くの部屋に入ることにした。

「……ティア、大丈夫か」

座ったフェンだが尚も抱きついたまま離れないティア。
ティアはフェンの言葉に頷くも、言葉は発さなかった。
フェンは尚もティアに言葉をかける。

「大変だったな、ティア。でも俺が来たからもう大丈夫だ。父様は
大丈夫。いつものように笑ってくれるさ」

「……ありがと、フェン兄」

微かに言葉を返すティア。

フェンはティアが落ち着くように背中をさすり続けた。

「ラディックス様、すみません」

「いや、大丈夫だ。それよりティアちゃんはどう大丈夫なのか？」

「安心したのか眠ってます。ティアも疲れてたんでしょう」

フェンは眠ってしまったティアを開いている病室のベッドに寝かせると状況を聞きにラディックスの元へとやってきた。

ラディックスは改めてフェンの姿を見て言う。

「……なあ、フェン坊。頭の上にタルケがのっているのは何だ？」

「……気にしないでください」

恒例化したフェンの頭の上のタルケについてのやりとり。

フェンはこのやりとりとうんざりしながら話を本題に持って行った。

「それで、ファンデル様の状況はどうなんですか？」

「なんだ、ティアちゃんからは何も聞いてないのか？」

「ええ……。話を出来る状況ではなかったのだ」

「……それもそうか。まだ意識は戻らない。傷自体は致命傷じゃないんだが如何せん出血が多い。まだどうなるかわからんとよ」

ラディックスはそう嘆く。椅子に座りながら、大きく天を（天井だが）を見上げた。

「すまねえな。俺がもう少し早く気付いてればこうはならなかった」
「……？」

フェンはそれからラディックスに怪我をしたときの状況について詳しく尋ねた。

アイシャ女王からの極秘任務。

海岸沿いの異変調査。

ファンデルが何かに気をとられている隙に野鳥から攻撃を受けたこと。

「うろこ……？ファンデル様が意識を失う直前にそんなことを？」

「ああ。これがその近くに落ちてた鱗だ」

ラディックスは鞆から鱗を取り出すとフェンにそれを手渡す。
巨大な鱗。半透明な黒い鱗で、かなり固い。

「これは……？」

「わからん。ただ、ファンデル様がそれに気をとられていたのは確かだ」

「魚の鱗にしては大きいですね……」

「ああ。フェン坊になにか心当たりはないのか？」

黙り込むフェン。フェンにこれと言って思い当たるものはなかった。

「フェン坊でもわかんねえか……。アイシャ女王にも報告したんだが、特にこれと言って思い当たることはないそうだ」

「……アイシャ女王が？ですが、今回の任務はアイシャ女王が極秘任務って言ってたのでは？」

その言葉に頭をかきむしるラディックス。

ラディックスのしっくり来ない心情を如実に表していた。

「そうなんだよなあ。だが、アイシャ女王は何も言わなかったんだ。俺には何が何だかさっぱりわからん」

フェンはもう一度黒い鱗をまじまじと眺める。

この鱗が一体何だというのだろうか。

歴戦の勇者であるはずのファンデルが簡単に隙を作る原因となったこの鱗がなんでもないとはい到底思えなかった。

「明日、調べてみます」

「ん？」

「アイシャ女王が何もいってくれないんなら調べるしか無い。何でもないはずがないでしょう」

「……そうか。それなら俺も手伝おう。ファンデル様が怪我したの

は俺のせいでもあるしな」

翌日。

フェンはファンデルの家に戻り、文献を探つてそれらしき記述がないか探した。

ティアはファンデルの側に付いており、ラディックスは王宮の錬金術師に何か参考になる資料がないか確認しにいった。

「しかし……この量の中から探すつてのはしんどいな……」

弱音を漏らすフェン。

調べるものはファンデルの書斎に並ぶ大量の書籍やファンデルの残した大量の研究文献。

頭の上のタルケがキューーと返事をするように鳴き声をあげた。

「お前は楽だから良いかもしれないけどよ……まあしょうがない、やるとするか」

フェンは一番近くにあった本から手をつけた。

「黒い鱗……黒い鱗……固い……大きい……巨大……」

そのキーワードを元に探すフェン。

だが小一時間ほど経過しても何も手がかりになりそうな資料は見つからなかった。

「だー！ー！見つかる訳ねーだろーが！」

「なあにをぎゃあぎゃあやってんだよ」

「うっほい、びっくりしたあ！」

ラディックスがいつの間にか部屋に入ってきていた。

「勝手に家に入ってくるのは不法侵入っすよ!？」

「何回もお前を呼んだってーの! ドアもノックしたし!」

そういつて自らの手を見せてくるラディックス。

赤くなったその手。ドアを見てみると何度も叩かれたのかやや凹んでる。

「……ドアを壊すのは器物損壊ですよ?」

「はぁ? フェン坊が気付かねえのが悪いんだろうが!？」

どっちもどっちなのだが。

しばし口論が続けた後に、フェンはラディックスに尋ねた。

「それで、何かわかったんですか?」

「いんや。この国トップの錬金術師さまに聞いても何もわからねえとよ。ガッスルフニンにでも聞きに行ったらどうかって言われたぜ」

「ガッスルフニンに?」

「ああ。あそこはここより錬金術の研究が進んでるらしい。ストリボーグ・アナーヒタ・ガッスルフニンの3国中では一番研究が進んでるんだとよ」

言いながらラディックスは近くにあった椅子に座り込んだ。

そして、目の前のテーブルの菓子をボリボリと食べ始める。

フェンはまた適当な本を読みながら、声をかけた。

「……それで、ガッスルフニンに聞きに行くんですか?」

「バカ言え。ガッスルフニンやストリボーグに知られたくないから

アイシャ女王が隠しているんだろ。それを俺がむざむざ聞きに行つてどうする」

「それもそうですね。……ってそうかアイシャ女王が隠している……か」

「ん？　どうかしたか？」

フェンは手元の本を棚にしまい、ラディックスの向かいに腰掛けた。

「アイシャ女王が隠しているのって不自然だと思いませんか？」

「ん？　どういう事だ？」

ラディックスはフェンの方に身を乗り出して言葉を聞いてきた。フェンはゆっくりと考えながら言葉を発していく。

「ちょっと待ってください。俺もそんなにはっきりしたわけでは無くて……」

「？」

「んーと、最初から整理しましょう。始まりはファンデル様がアイシャ女王から極秘任務を命じられたこと。それで、ファンデル様はラディックス様に任務の同行を命じた」

「ああ、その時にファンデル様が仰っていたのは、海岸の異変の原因調査。思い当たる原因は2つあって、一つはクラークン。もう一つははっきりと言わなかった」

「この鱗が、ファンデル様のはっきり仰らなかった事と関連があることは明らかですね」

「ああ。そして、その鱗をみることでファンデル様ははっきりと動揺していた」

フェンは頭をかきむしり、思考をまとめていく。

「それから考えられるのは、何かとても良くない事態が起こっていると言うこと」

「……ただ、アイシャ女王は何も仰らない。これが不自然だな。何か良くない事態ならアイシャ女王が何らかの動きを見せても良いはずだ」

「……どういう事でしょうか」

「さあな。アイシャ女王もよくわからないんじゃないか。もしくはファンデル様が口止めしてた、とか」

あの2人実はデキてたりしてな。イケナイ恋愛、良いねえ——などと空想の世界に飛び立つラディックス。

だが、ラディックスがぼやき気味に漏らした言葉がフェンの頭に引っかかった。

——わからない？

「そうか。そうですよ」

「ん！？ホントにあの2人できてんのか！？」

「じゃなくて！！よくわからない、って話ですよ」

「は？」

一息入れてから話し出すフェン。

頭の中を整理していきながらゆっくりと話していった。

「えーと、おそらくアイシャ女王も詳しくはわからないんです。海岸の異変は何らかの危険のシグナルと言うことは知っている。だから極秘任務で原因調査を命じた」

「……続ける」

「命じられたファンデル様はその危険について詳しく知っていて、そしてその危険が迫っていることを知った。それをアイシャ女王に

伝える前にファンデル様が意識を失った」

「……ファンデル様がその危険を知っていたとは限らないぞ？」

「いや、知っているでしょう。ファンデル様は嘗て先代王、ニヌルタ様から王家のみが見ることを許される書物を見たことがあるはずです。イルサツクの花を探すときに」

「イルサツク……そうか。そんなこともあったな」

大きく息を吐くラディックス。

イルサツクの花とは、数年前にファンデルが命じられた任務である。

その任務中にファンデルはフェンを拾ったのだ。

「俺には、いささか話がぶっ飛びすぎてると感じるが」

ラディックスは少し冷め気味に言葉を発する。

だが、フェンは冷静に対処した。

「いいんです。そのせんでもう一度調べてみて間違ってたらまた別の可能性を考えれば良いんです」

「またむちゃくちゃな事を……」

「なあ、フェン坊。お前俺の部下になんねえか？」

「はい？」

「最近、そうやって考えて行動する兵が減ってきたんだよ。色んな面でな。だからお前みたいなヤツは貴重なんだ」

「……遠慮しますよ。俺にも減ってしまいましたが部下がいますんでね」

「減った？」

「ええ。ヴァサームの戦いの時に――！？」

急にはじかれたように立ち上がるフェン。
そして、書斎の本の山から何かを探していた。

「おい、フェン坊！？なんだってんだ！？」

「ヴァサーム防衛戦でドラウグという化け物が現れたんです！！」
「どらうぐ？」

「はい！そのドラウグの記述を本で読んだときに一緒に気になる記述があったんです。何で今まで忘れてたんだ……」

フェンは山の中から目的の本を見つけると急いでそれをテーブルの上に広げた。

ラディックスもそれを一緒に読む。

「ええと……これだ。ドラウグ。水死体と呼び覚ましたもの。身体には水草を纏わせて、首を焼かなければ死なない……」

「こんな化け物がヴァサームに現れたってのか！？」

「はい……。あつた、これだ。ドラウグはヘルによって呼ばれる。

ヘル——ネクロマンシー死霊魔術を使う精霊」

「ネクロマンシー！？死体を思いのままに操る魔術の事じゃねえかよ！？」

「ヘルについても記述があります……えーと、このページです」

「ヘル……神と対存在。ヘルを従えるものは自己を失う……？なんじゃこりゃ」

ラディックスは眉を寄せるがフェンも首を振る。

「わかりません……。ええと、その次の段落は……ヘルの力はネクロマンシーだけではない。水に黒竜を、陸には黒狼を呼び寄せる」
「黒竜の名はヨルムンガンド。黒狼の名はフェンリル……。おい、

もしかしてこれが……？」

「……」

2人は言葉を失った。

2人が見ている本には挿絵が載せられている。

ドラウグの挿絵はフェンが見たものと相違ない挿絵。再現性は高そうだ。

ヨルムガンとフェンリルの挿絵はその挿絵から考えるに大きさだけでも数10メートルは考えられるのだ。

「ホントにこんな怪物が現れたらまずいぞ……」

思わず漏れた言葉が2人の心境を如実に表していた。

▼

一方、その頃王宮では会議が開かれていた。

出席者はアイシャ女王。その夫のルード王配やその他大將軍などのこの国の重鎮たちだった。

会議の内容は今朝方傍受した敵国の通信内容。

その通信内容とは、

「しかし、アイシャ女王。本当なのですか？ ストリボーグとガッスルフニンに同盟の兆候というのは……」

「残念ながら信頼度は高いと考えます。ストリボーグ・ガッスルフニン両国の国内通信から別々に同じ動きを傍受しました」

1人の將軍が尋ねる言葉に頷くアイシャ女王。

その表情は固く険しかった。

「しかし、何故今になってこんな……？ つい先月までガッスルフニ
ンとストリボーグでは交戦が確認されていたのでは？」

「全くだ！ やはり悪質な情報の操作では！？」

「しかし、信頼度は高いはずだぞ！」

煮詰まらない議論。

アイシャ女王が事態の收拾にはかろうと動いたが、その必要性は
なかった。

「今はそんな議論をすべきではない。両国が同盟を結んだ背景など
我々にはわかるはずもないのだ。問題は対応策ではないのか？」

その重い声で場の空気は一気に冷え込んだ。

アラン・イド。

フレイヤやニーヌの父親であり、かつてはファンデルと伴にこの
国で英雄視されていた。

今は戦場の第一線を退いたものの、しばしばこのような会議には
参加している。

アイシャがアランにそっと目配せすると、アランは微かに頷き発
言を続けた。

「両国が同盟を結ぶとすると、次に予測されるのは当然ながら我々
アナーヒタへの攻撃だ」

「アラン大將軍の言うとおりです。今までこの大陸は3国間でのバ
ランスが保たれてきました。同盟が結ばれたのならば必然的に大戦
となるでしょう」

アイシャがアランの言葉が続ける。

「現在、ファンデル大將軍は負傷し、我が国の戦力は格段に低下しております。このようなときに、都市を失いストリボーグやガッスルフニンの侵攻を許してしまうと、そのまま敵国は攻勢を強める可能性があります」

アイシャ女王がその言葉を続けていると、会議室のドアが開いた。一斉に視線が集まる。

入ってきたのはアイシャ女王の側近の秘書だった。

その秘書はアイシャとルードに何事か耳打ちすると、2人は顔色を変えた。

「すみませんが、しばし私は失礼します。会議の方は続けてください」

それまで黙っていたルードはそう発言すると、退室した。

いったんざわめきかけた、会議室内だったが、アイシャ女王が何事もなく対応策の検討について話を始めたことで、再び会議は厳粛な雰囲気となった。

「何だと言うんだ、ラディックーと、フェンも居たのか」

「すみません、ルード様」

「ほーう。偉くなったなあ、ルードも。『何だと言うんだ』だってよ、ククク」

頭を下げるフェンと茶々を入れるラディックス。

ぞんざいな物言いに顔をしかめるルードだが、すぐにその顔をゆるめた。

「フエン坊何をきよんとしてやがるんだ？」

「……え？あ、いや、随分と2人が親しいので……」

きよんとするフエンを見てラディックスとルードはお互いの顔を見合わせる。

ルードは笑いながら言う。

「ああ、フエン。私とラディックスは昔からの知り合いなのだよ」

「そうなのだ」

「だから、ラディックスは私が王配となった今もこのような口の利き方なのだ」

「なのだ」

「前から、私が王配になったというのだから立場上口調は改めろと言っているのだがな。相変わらずこいつは口調を変えないのだ」

「のだ」

「のだのだ、うるさいな!!」

「ククク……いや、お前がこうやって王配の立場として喋るときは、のだと必ず言うからよ」

嘆息するルード。一方ラディックスはこらえきれないといった様子で笑顔を見せていた。

「はあ……良いから用件を話せ。今大変なことになってるんだよ」「大変なこと？」

「なんでもない。時間がないんだ、さっさと話せ」

「わあったよ。ファンデル様に命じた極秘任務はヨルムンガンドの件を疑ってと言うことで良いんだよね？」

「……何故それを？」

ルードが狼狽を隠さずに聞き返す。

その姿にフェンは笑いの衝動がこみ上げたが何とかこらえた。

「ラディックス様と一緒にファンデル様の書斎を調べてきたんです。これがそれで見つけた史料とこっちがファンデル様が任務中に見つけた鱗です」

ルードはフェンから本を受け取ると眉間に皺を寄せて目を通していく。

「そこに書いてあるドラウグはさきのヴァサーム防衛戦で私が直に相對しました。信憑性は高いと考えられます」

「なあ、ルード。これが本当だとしたら、アナーヒタの危機だぞ。一刻も早くアイシャ女王に伝えて――」

「これは良い情報だ。確かに、あの極秘任務はヨルムンガンドの件を疑ってのものだった」

その言葉にお互いの顔を見るフェンとラディックス。

ここまで早くルードが本音を漏らすとは思わなかった。

「……ずいぶんと簡単に漏らすんだな」

「隠してほしかったのか？ 今更お前達に隠したところでもう意味はないだろ」

「まあ、そりゃそうだけだよ……」

「ルード様、この話は一刻も早く各都市の防衛にあたる中隊長に伝えた方が良いと思うのですが」

「いや、この話はまだ誰にも話すな」

ルードの言葉にくっつかかるラディックス。

「はぁ！？何でだ！？」

「この国の存亡を揺るがす大ニュースだからだ」

「ですが、少なくとも軍の上層部や隊長クラスには話を伝えても構わないと思うのですが……」

「ああ、フェンの言うとおりだ。少なくとも危険性くらいは伝えても構わないだろ？」

2人の言葉に表情をしかめるルード。

そしてゆっくりと首を振った。

「話すな。それが命令だ。こちらにも事情がある――」

「それじゃあ、こいつは渡せねえな」

ラディックスがルードの手元から本を奪う。

ルードは一瞬目を丸くしたがすぐに、ラディックスを睨み付ける。

「おい、自分が何を言っているかわかっているのか？お前とは確かに友人だが、今は立場が違うんだぞ」

「……なあ、何隠してるんだ？さっきからお前の、いや、お前とアイシャ女王の動きは正直言って変だぞ。ファンデル様に極秘任務を命じて、その極秘任務で負傷したファンデル様に何も言葉をかけない」

ルードもフェンも何も言わない。

「それどころか、俺たちが情報を提供しても礼の一言もよこさない。なあ、一体この国で何が起こってるんだよ？」

「俺たちは仲間なはずだろ。信頼して情報ぐらい――ってフェン？」

フェンはラディックスの手元から本を奪うとそれをルードの方へと放り投げた。

慌ててルードはそれをキャッチする。

「ラディックス様、もう良いでしょう。ルード様の立場じゃないですけども言えないこともある。それだけで十分だと思いますよ」

「おい、何を言うんだよ？」

フェンとルードはお互いに目を合わせる。
頭の上のタルケがキューーと鳴いた。

「立場が変われば見えてくるものも変わる。父・ファンデルの言葉です。ルード様や軍の上層部の話は私にはわかりません。ルード様が言えないと言うなら俺は無理に聞こうとは思いません」

フェンは言葉を残すとルードに一礼し立ち去ろうとする。
だが、その背中にルードが声をかけた。

「わかった、言うよ。言やあいんだろ？」
「そう来なくっちゃ！」

笑顔で振り向くフェン。
カマをかけられていたことを悟るルードだったが、先ほど言った言葉はもう取り消せなかった。
ラディックスが笑いながら言う。

「フェン坊も人が悪いな」
「ラディックス様ほどじゃないですよ。それで、ルード様一体何が起こっているんですか？」

「……はあ。まだ内密に頼むぞ？」

途端に頷く2人。

挙げ句の果てには目をきらきらと輝かせている。

自分がとんでもないミスをしたような気がしたが、やむを得ない。

「……ガッスルフニンとストリボーグに同盟の兆しがある」

直後、大声を出した2人のせいでルードが大焦りする羽目になったのは言うまでもない。

第七章 ヴァサーム、再び

フェンはアイツヴェンから再びアソールへと向かった。
タイシとエミリー。

2人しか残っていないフェンの部下とそこで合流する。

「よう、すまねえな、2人とも。わざわざ出迎えてもらって」

「フェノア様が私たちに迎えに来いと言ったんじゃない」

「あなたを迎えに来たのではないわ！私はあなたの頭の上のタルケと会うために来たの！」

「おお泣かすねえ、エミリー。今時ツンデレは流行らねえと思うぞ」
「そうですか？」

「まあ俺はそう言うエミリーも好きだけだよ」

「あら、そんな照れることをこんな白昼堂々と……続きは今夜ベッドでお願いします」

「ああ、しょうがねえなあ……ってタイシ、どうしたため息なんかついて」

肩を落とし長嘆するタイシ。

何で僕はこんな部隊に所属になったんでしょうか、と愚痴をこぼすも尚も漫才を続ける2人の耳には届かない。

フェンはタイシのその様子を見て苦笑を浮かべて、真面目な話を持ち出した。

「なあ、タイシ。ところで俺がアイツヴェンに戻っている間に何か変わったことはあったか？」

「え、あ、はい。ええと、特にはないです」

エミリーが後を引き受ける。

「フレイヤ様はアソールについて先ほど戻られましたし、ニーヌ様も怪我が癒えて、任務に戻ったそうですよ」

「そうか。あいつも怪我が治ったのか、それは良かった。ああ、そうそう。俺らに新しい任務だ。しばらくヴァサームに行ってくれてよ」

「はあ、また異動ですか!？」

「ああ。ヴァサームの復興が済むまではそっちの援護に迎えてよ」
「ですが、フェノア様。私たちの部隊は3人しかいないのでそこまでの戦力にならないのでは？」

「知らんよ。まあ、行けって言うんだ、行くしかないだろ」

▼

ニーヌは街の復興作業にあたっていた。

見張り台や軍備の復旧。それと失われた兵力の補充と怪我人の介護。

中心に立ってあれこれと指示を飛ばしている。

「ニーヌ様!！」

「何よこの忙しい時に!」

「アイツヴェンのアイシャ女王からの直接通信です! 防衛戦についての詳しい報告をしてくれとのことですよ」

「またあ!?! さっきもしたばかりじゃない。だいたいフェンがアイツヴェンにいるんじゃないの? それならフェンから聞けばいいのに……」

「わかりました! そう伝えます」

「いや、待って待って! 女王様にそんなこと言えるわけ無いでしょ!」

「……?」

「はあ……もういいわよ。あなたたち、しばらくここをお願いね」

ニーヌは諦めたようにその場を立ち去る。

これで通信兵を介して戦について報告するのは4度目だ。

もүүいい加減話すこともないというのに一体何を聞いてくるとうのだ。

そんな鬱々とした感情を抱きながらニーヌは通信室に入った。

通信室。

この大陸で通信に用いられているのは特殊な精霊だ。

ネレイデスと呼ばれる精霊。

ネレイデスとはそれぞれの精霊に与えられる固有の名称ではなく、テレパシー能を有する精霊たちに与えられる名称。

彼らは固有の名称を与えられては居ないが、その有する能力の特殊性から重宝されていた。

ネレイデスを従えている人間と同様に。

「お邪魔するわ、サエ。何回もゴメンね」

「……えと、すみません、私の顔を何回も見なきゃいけないくて」

「何言ってるの？」

「いえ、でも良いんです……私はニーヌ様のお顔を拝見できただけで満足なんですから」

「……いいから、テレパシーを始めてもらえる？」

通信兵は変わった性格の人間が多い。

ネレイデスを従える人間には職業選択の自由が無く、生まれながらにして通信兵への従事が義務づけられる。

通信兵に変わった性格の人間が多いのはそれによる人格の変化なのか、それともネレイデスによる人格変化なのか定かではない。

閑話休題。

サエ。ヴァサームの通信を担当する女性兵である。

彼女も少々変わった女性である。

引っ込み思案。思い込みが激しい。女性好き。

スレンダーでコケティッシュな見た目とは裏腹な彼女の性格故に、サエの居る通信室にはなかなか人が寄りつかなかった。

「……ああ、ニーヌ様は私としての私ではなく通信兵としての私をお求めなんですね」

「……わかったから。あなたは十分魅力的だから。でも今は任務を終わらせなければならぬだけなんだから」

だから早くしてくれ。

との言葉をやっとの思いで飲み込む。

一方サエはニーヌの言葉に恍惚とした表情で喜びを噛み締めていた。

「……サエ、とにかくテレパシーをお願い」

「ええ、私を（・）愛しいニーヌ様、かしこまりました」

「……はあ」

サエは目を閉じて大きく深呼吸をした。

そして、ネレイデスを呼び出す。

呼び出されたネレイデスはサエの身体の中に消えていった。

そして、ネレイデスをジャンクションする。

ネレイデスと融合した人物の発する声は遠く離れたところのネレイデスと融合する人物の近くで発する声と同じ声になる。

電話機。どこか遠くの世界で伝えられる文明機器と共通点が多い。そのため、このネレイデスを従える人間は重宝されるのだ。

「すまないな、ニーヌ」

「兄様！？じゃなかったルード様！？」

「ハハッ、この交信は非公式なものだ。兄様で構わんぞ」

相手は兄のルードだった。アイシャ女王だと思っていたために驚いてしまった。

ルード・イド。

イド家の長男であり、現在はアイシャ女王の夫としてこの国を支えている。

ちなみに、イド家の家系は父のアラン・イドが大將軍。長男のルードは王配。フレイヤは將軍。ニーヌは中隊長とこの国を支える屋台骨である。

「……えと、アイシャ女王からの直接通信だと思ってたんだけど？」

「ああ、そのつもりだったんだが、アイシャには別件の通信が入ったのでな。ファンデル様が意識を取り戻したそうだ」

「え！？ちよっと兄様！？」

「ああ、それなら大丈夫だ。この通信には盗聴妨害用にアルセイデスの念波を送っている」

ニーヌが慌てたのには理由がある。

一つはその情報そのものに対しての驚き。

もう一つは、傍受の危険性があるこの通信でファンデルが負傷してたという事実を明らかにしたこと。

だが、ルードはあっさりとその焦りの必要性を否定した。

ネレイデスによる通信は完全ではない。

目的とする人物にテレパシーするだけでなく、他の人物がそのテレパシーを傍受することも可能なのだ。

その盗聴を防止するのが、アルセイデスと呼ばれる精霊。

ネレイデス同様にとある一群の精霊たちの名称だが彼らの有する能力はネレイデスによる通信の強靱にすること。

この能力故にアルセイデスを伴に用いた通信は傍受がきわめて困難となる。

「あ、そうなの……ってそんな念入りに何の話をするつもりなの？」

「ああ……ストリボーグとガッスルフニンに停戦協定と同盟の動きがある」

「え！？ウソでしょ！？」

「事実だ。今のところは極秘情報なのだが、お前のいるところは国境最前線だ。念のため伝えておくことになったのでな」

「そう……」

「どうなるかわからないが、用心するに超したことはない。しばらくはストリボーグとガッスルフニンの動きに気をつけてくれ」

「わかった……ありがとう。話はそれだけ？」

「それから、しばらくそっちにフェンが向かう」

「フェンが？」

「ああ、念のためだ。戦力は多い方が良い。とにかく、頼むぞ」

ルードのその言葉を合図にニーヌはサエの頭から手を下ろした。

そして、サエはうつろだった目の焦点がニーヌに合うと意識を覚醒させる。

「通信は、もう終わりですか？」

「ええ。ありがとう、サエ。また用があつたら来るわ」

「……用がないと来ないんですか？」

「それじゃね、サエ」

サエの言葉を見殺して出るニーヌ。

ニーヌは先ほどルードから伝えられた言葉を頭の中で反芻させていた。

「

夜、ニーヌは今日の復興作業を終えて食事に向かっていた。

昼間にルードから伝えられた言葉が胸に引っかかる。

ルードの言葉が事実ならこの土地はますます戦争が激しくなるだろう。

果たして、自分は生きていられるのだろうか。

そんなくらい想像が頭をよぎってしまった。

「はぁ……いい加減疲れたわ……」

そう呟きながら静かな行きつけの店に向かう。

いつもは静かなその店が今日はやけに騒がしかった。

騒がしい一団の中心に見えるのは真っ赤な髪の毛。

3人しかいないその一味は数十人分の大声でどんちゃん騒ぎをしていた。

「……って、何であのバカがまたこんな所に……」

とても一緒に騒ぐ気分には慣れないニーヌはまわれ右をして帰ろうとしたのだが今度目に入ってきたのは見覚えのあるオレンジの髪の毛。

その下の顔を見ればどこかで見たようなコケティッシュな顔。

この顔を見たのは昼間、通信室で――

「サエ！？何であんたもこんな所に！？」

「尾けてきました、ニーヌ様」

悪びれもせずに答えるサエ。

あまりにすがすがしく答えるものだから流してしまいそうだったが、サエの言葉の重大性は見逃すことが出来なかった。

「尾けてきましたって！？」

「ええ、わかりますわ、ニーヌ様。ニーヌ様は私を夕食に誘いたくて仕方がないのに、その奥ゆかしさ故に私に誘いの言葉をかけることも出来ずにいらっしゃったのでしょうか？そのお心遣い、とても無駄には出来ませんわ」

「いや、ちょっとまって、サエ」

「今日の昼間の帰り際のニーヌ様。私の言葉を見無視して帰りなされたニーヌ様。そのニーヌ様が目だけでくれたアイコンタクト、私だから気付くことが出来たのですよ？」

「……」

この女は常識を教わらなかったのか。

どうしてこんな思考回路が働くのか。

ニーヌがサエとすったもんだしていると今度は酔っぱらいが絡み出す。

「ようー！ニーヌじゃねえか！お前何突っ立ってるんだよ！さっさと飲めよ！」

「バカ、酒臭いのになつかないでよ！」

「そりゃあ、酒臭いさ、酒飲んでるんだから！それともなんだ？お前は水飲んで酒臭くなるってのか！？」

「あーもう、うるっさい！良いから離してよ」

「そりゃあ、うるさいさ！大声出してるとんだからよ！それともなん

だ？お前は小さな声でもうるさく聞こえるほど――」

もういやだ。

私が一体何をしたというのだ。

目の前の赤髪の男は上機嫌で自分に絡んでくる。

その近くにいる女性――確かエミリーという名前だ――は我関せずといった感じでもう1人の男性兵に絡んでいる。

その男性兵は飲まされすぎたのか身体を左右に揺らしながらエミリーに謝り倒している。

後ろを向けば……サエが仲間になりたそうな目でこちらを見ている。

私は静かに飲もうと思っていたのに。そんな心の声は喧噪にかき消される。

「いいんですよ？私はニーヌ様と2人だけでなく、この方達と一緒にいたとしてもニーヌ様の私への愛が薄れただなんて思いませんから！」

「あーもう！何なのよ、一体！わかったわよ、飲めば良いんですよ、飲めば！」

「よ！ニーヌ様わかってるう！」

「うっさいわよ、タイシ！」

「キューー」

フエンの頭上のタルケが大きな声で鳴き、乾杯の合図となった。

1時間後

「ニーヌ様、もう飲めません……」

「なあにいい？ 私のお酒が飲めないっていうのお？ 良いときよおしてるわね、エミリー」

「ニーヌ様！それならニーヌ様のお酒は私がありがたく頂きます！ああ、これもニーヌ様の愛情……」

ニーヌもすっかり楽しく飲んでいた。

先ほどのまでの鬱々とした感情はどこへやら。

エミリーやサエと伴にがやがやと飲んでいた。

ちなみにタイシは既に突っ伏して寝ており、フェンはすっかり酔っぱらった他の4人に少々引いていた

「タイシ、何寝てんのよお！」 小突くエミリー。

「うへへ、もう無理らよお、エミリちゃあん」 椅子から転げ落ちたぞ、タイシ。

「何よなによお、もしかして2人はそう言う関係なのお？」 身を乗り出すニーヌ。

「ダメです、ニーヌ様。ニーヌ様は私のものなんですから？」 食らいつくサエ。

「キューイー」 ああ、お前だけが仲間だタルケ。

「フェノアも飲みなさいよお！」 攻撃対象が変わったエミリー

「うへへ、もう無理らよお、アスカちゃあん」 アスカとは誰だ、タイシ。

「まったくよお、だいたいフェンはあ、なあに1人だけそんなしらふなのお」 絡み出すニーヌ

「ダメです、ニーヌ様。ニーヌ様は私のものなんですから？」 もう話の流れも関係ないサエ。

「キューイー」 ああ、どうして酒瓶にダイブするんだ、タルケ。

もういやだ。

一体俺が何をしたら――いや、確かに飲みには誘ったが、どうし

てこうなった。

ニーヌもエミリーもサエもどうなっているのだ。

フェンの酔いはすっかりと醒め、事態の收拾を図る——わけでもなく再び飲んで現実逃避にはかった。

飲まなきゃやってられない。

こうして完成した5人の酔いどれたちは店の閉店を合図に店を出ることにした。

時間も時間だし、帰ろう——というごく常識的な判断がこの酔っぱらい達に期待できるわけもなく、彼らは適当な店で大量に酒を買い込むと近くの広場でがやがやと騒ぎ出す。

だが、暖かくなってきたとはいえまだまだ寒いヴァサーム。

千鳥足で目的地に向かっていている間にニーヌはだいぶ正氣に戻り始めた。

遠くの方でがやがやとまだ飲み続けるフェン達を遠巻きに眺め、ゆっくりと地面に寝転んだ。

「はあ……つかれた」

「ようー、ニーヌ。なーにしけたツラしてんだ？」

いつの間にかフェンが側に来ていた。

フェンはニーヌの隣に腰掛けて座る。

「この状況で笑ってられるあんたが凄いわよ」

実際少々気持ち悪い。変なスイッチが入ってしまったとはいえ少々飲み過ぎたと反省していたところだったのだ。

フェンは手元にあった酒をぐいっと飲むと大きくのびをする。

「だってよお、笑ってなきゃつまんねえだろ？」

「はい？」

「苦しかったら笑え。無理してでも笑え。バカみたいでも笑え。俺の好きな言葉だ」

「誰の言葉よ？」

「聞いて驚くな！なんとフェノア・ニクス様の言葉——」
「バーカ」

フェンが言い切る前に罵ったニーヌ。罵られたはずのフェンはそんなことを気にもとめずに意気揚々と酒を飲んでいた。

ニーヌがぼんやりと空を見上げていると、腹部の辺りに何かの重みを感じた。

下を見るとキューイーという鳴き声。フェンの頭の上いつものっているタルケだった。

ニーヌはそれを両手で掲げる。

「ねえ、フェン。あんた何で最近このタルケをのせてんの？」

「そりゃあ——」

「バカじゃないの」

「まだ何も言ってねえわ！」

「じゃあ早く言いなさいよ」

いつものフェンなら怒り出しそうな扱いだが、酒の力か陽気に話していた。

「アソールで女の子から預かったんだよ」

「女の子から？タルケを？バカに預けたの？」

「最後の一個は余計だ。まあ、説明すると長いんだがよ」

フェンはそう言うとき軽く経緯を説明し始めた。

カメラリアという少女との出会い。
その少女が立ち直るまでの一幕を。

「へー。そんなことがあったの」

「ああ、だから」

「バカじゃないの」

「まだ何も言ってるわ！てかボケるつもりもなかったわ！」

「うるさいわねー。ぎゃあぎゃあ」と

「なんだとーてめえ、飲ませてやる！」

再びキューと鳴くタルケ。のそのそと定位置であるフェンの頭の上に登っていくその様子がなんだか間抜けに見えた。

思わず笑い声を零すニーヌ。

ぎゃあぎゃあと騒いでいたフェンが不意に真剣な顔つきになった。その急変に思わず息を呑むニーヌ。

「お？ようやく心から笑ったんじゃないの？」

「は？」

「なーんか、おまえ最初に店に来たときは暗い顔してたからよ。まあ、そうやって笑えんなら心配ねえか」

思わず顔をまじまじと眺めてしまう。

そんな様子には気付きもせずはまだ喋り続けるフェン。

「俺もストリボーグとガッスルフニンの話は聞いたさ。だから、お前が悩んでるんじゃないかねえかって思ってたよ。まあ、お前なら出来るさ、がんばれよ」

「き、急に何言い出すのよ」

「ふん、まあ聞き流してくれてもいいけどよ。俺はお前の強さに憧れてるんだ。ストリボーグなんか蹴散らせよ」

ああ、そうだった。

この男はいつだってこうだ。いつもバカをやってばかり。それでも、こうやって急に魂を揺さぶるような言葉を言うんだ。あのとときだってそうだった。

――強いし、かつこよかったからな、ニーヌは。

あの言葉で私は救われたのだ。

札を言おうと口を開きかけたが。

だが、その口に容赦なく液体が強行突破してくる。

「ダッハッハッ！うわ、お前酒まみれじゃねえか！」

見上げるとフェンが楽しそうにニーヌに向かって酒をぶっかけてきた。

よく見ればいつの間にか近くに来ていたエミリーやタイシも酒をかけてビールかけ状態となっている。

サエは全身ずぶ濡れで泣きべそをかいていた。

文句を言おうとしたが、馬鹿馬鹿しくなり復讐することにした。

「やったわね！あんたたち！覚悟しなさい！」

「ちょ、ニーヌ！剣は止めろ！」

「峰打ちよ！切捨て御免！」

「うぎゃー、フェノア様、何で僕を見殺しに！」

「許せ、タイシ。戦争には犠牲がつきものなんだ――ってサエ、止めろ！何をする！」

「ニーヌ様、傷つける人許さない。私、フェノア様許さない」

キューーと鳴くタルケ。

まだまだこのどんちゃん騒ぎは終わりそうもなかった。

第九章 秘められし力

「あゝ気持ち悪い……」

「情けないぞ、タイシ」

「情けないわ、タイシ」

心からのぼやきに容赦なく降りかかる言葉。

死にそうな思いをしながら頭を上げてても鋭い視線が降り注ぐだけ。折れそうな心を必死に再建すると、自分をここまで二日酔いでグロッキーな状態にさせた2人にくってかかる。

「……誰のせいでこうなったんですか……」

「そりゃあ、飲み過ぎたお前が悪い」

「その通り。だいたい私の方がタイシより飲んでたわよ」

再び心が折れる。

でもこれは正当な抗議なはずだ。

「……わかりましたよ。僕が悪かったです。ですから今日は休ませてくださー」

「却下だ、タイシ君」

「まったく、タイシはそれだから皮もむけない半人前なのよ」

「……もう良いです」

ああ言えばこういう。

この2人の心には何を言っても響かないだろう。

「さーて、2人とも。今日はこれから楽しい建築業だ」

「けんち、くぎょう?」

「ああ。見張り台が壊れたからその復旧作業がタイシの任務」
「タイシがそれをやるんですか」

「ああ、そうらしい。俺たちはタイシのサポートだ」

「そう、頼もしいわね、タイシ。さっきの言葉は撤回するわ」

「……何故僕ひとりでやらなければならぬのですか……」

タイシのぼやきは相変わらず届かない。

やはりこの部隊に所属になったことを後悔するタイシだった。

▼

「いやー絶景絶景。この世界は余のもの――」

「フェノア様、三日天下をご所望ですか」

作り始めて三日ほど経ったが、未だ未完成の見張り台。

その頂上で夕日を眺めながら気分良く大声を出していると後ろからエミリーの冷たい一言がかけられた。

「驚かせるなよ、エミリー」

「ちつとも驚いてないくせにそんなことを」

「いくら何でも部下に背後を取られるわけにはいかねえさ。それよりタイシはどうしてる？」

フェンの横にエミリーがならぶように立った。

眩しそうに夕日を見やる。エミリーの緑の瞳は遠くを見ていた。

「タイシならとっくにもう休んでます」

「ちつ、もう休むなんてあいつは根性ねえなあ」

「直情型単細胞馬鹿のタイシです。こういう器用で繊細な任務はあのバカには不向きでしょう」

「おいおい、ひどい言い様だな」

エミリーの歯に衣着せぬ物言いに笑い声を上げるフェン。

エミリーも顔に笑みを浮かべたのだが、その笑顔がフェンには少し引かなかった。

少し影のある表情。

フェンは迷いながらも突っ込んでみた。

「タイシとはもうやったのか？」

「ブホッツツツ!!」

突拍子もない質問は奇声で返ってきた。おまけに鼻水の噴射付き。

「その反応はまだなのか……。じゃあもしかして親への紹介はもう済んでるのか？」

「んな訳ありません!! 順番ってものが!! っていうかそもそも何で私がタイシ——」

「んー? じゃあやってから親への紹介をしてやって結婚って言う流れか」

「違——う!! しかもやりすぎ!!」

「いやゝ相変わらず良いツツコミだな、エミリーは」

「全く……一体何なんですか、唐突に」

頬をふくらませるエミリー。

フェンは今度こそ本当にエミリーの影に突っ込んでみた。

「それで、タイシとは本当に何もないのか？」

「はい!？」

首の骨が折れそうな勢いでフェンの方を向くエミリー。
その眉間には皺が寄せられている。

「いや、別に恋仲にあるんじゃないかねえかな〜とか思ってる訳じゃないよ。ただ、どうもただの同僚には思えねえからよ」

「……」

「言いたくなきゃ帰っても良いぞ。ただ、帰る前に俺の質問に答えてからにしろよ」

「……言ってることが矛盾してます」

「なーに、こう、ちよろちよろ、つと言やあ良いんだよ。部下の心境を知っとくのも上司な大事な心得だからよ」

「……」

大きなため息が出る。

だが、隣からは絶え間なく視線が注がれているし、観念するしかないようだ。

「似てるんですよ、弟に」

「弟？」

「はい。真面目で、融通聞かなくて、頑固で……。背格好は全然違うんですが、言ってることとか、行動がダブるんです、弟と」

フェンの視線の先のエミリーは少し寂しげな目をしていた。

夕日に染められるエミリーの整った顔。茶髪が風にそよぎ地面に赤と黒のコントラストを生み出していた。

「戦争で弟は死にました。弱い私では守れませんでした」

「軍に入ったのは、それが理由か」

「ええ。強くなりたい、それだけです。男は単純って言うけど、女

も単純でしょう？」

エミリーは自嘲気味に笑いながら問いかける。
顔に浮かぶのは、後悔。

いつもふざけてばかりのエミリーの心の奥底に眠るものが垣間見えた。

「フェノア様はどうして軍に？」

「あ？」

「私に言わせておいて言わないなんてのはナシですよ」

少しの時間の空白をおいてエミリーが問いかけてきた。
まっすぐ見つめてくるエミリー。

フェンはもうほとんど沈んでしまった太陽に目を向けながら答える。

「強さに憧れたんだ」

「？」

「俺にはやらなきゃいけないことがたくさんある。その方法として強さが必要だったんだ」

「抽象的ですね？」

「……俺はミステリアスな男なんだよ」

「どの口がそんなことを」

笑い声を零す2人。

だが、フェンは決して心の中を話したわけではなかった。

フェンのやらなければならないこと。

その内容は多くの人を裏切ること。

この国を裏切ることなのだ。

▼

数日後。

完成した見張り台の見張り番からフェンに敵襲の知らせが入った。その敵国は好戦的だったストリボーグではない。ガッスルフニンだ。

「それで、どうするよ、ニーヌ」

「どうするも何も、作戦のたてようもないでしょ。こっちはまだまだ復興できてないんだから」

「ま、そりゃそうか」

現状、フェンとニーヌの居るヴァサームの兵数は200前後。見張り番からの報告では敵兵数は100前後と推測された。

「それにしても随分中途半端な兵の数だな」

「本当ね。本気で攻めてくる気があるのかやらないのやら」

「同盟締結、の噂が本当かどうか判断しづらいな」

ストリボーグとの戦闘しかり、こここのところ急に敵襲が増えていた。

ただ、その割に敵国から本気で攻め落とそうという意志が感じられないのも事実だった。

同盟を結んだことにより、2国間の国境付近の兵がアナーヒタへの攻撃に当てられているのはわかる。

だけど、それにしても中途半端だった攻め落とす気があるのか、無いのか。

「とにかく、またいつも通り消耗戦か？」

「……そうね。性に合わないけど――」

「その必要はないんじゃないかねえか？」

フェン達は後ろから急にかけられた声に振り返る。

そこにいたのは茶髪の大男。

ラディックスだった。

「ラディックスのおっさ、じゃなくて、ラディクス様じゃないですか」

「フェン坊、今、俺のことをおっさんつつただろ」

「そんな事より、ラディックス様、どうしてここふえ！？」

ニーヌに思いっきりケツをどつかれ、舌をかんでしまった。

恨みがましくニーヌを睨むがニーヌはフェンに一切目もくれず、ラディックスと会話しはじめた。

「ラディックス様、援軍ですか？」

「久しぶりだな、ニーヌ。ああ、ここの援軍に行けとの指令を受けたんだ。たった今付いたばかりだが、ちょうど良かったみたいだな」

「……ありがとうございます。それで、先ほどの言葉はどういう意味ですか？」

「ああ、実は今回の援軍は俺の部隊全員で来てるんだよ。兵の数は400人」

「400！？そりゃまた心強い……」

ニーヌの暴力で受けた負傷から復帰したフェンも会話に参戦し始めた。

フェンはラディックスの言葉に安心すると去ろうとする。

ラディックスに今回の戦を任せて自分は休もうという魂胆だったのだが、その目論見はあっさり却下された。

「それで、ニーヌ。今回は休んでな。俺とフェン坊でガッスルフニンは追っ払っとくし、問題ないだろ」

「な、そんなわけには……いえ、わかりました。お願いします、ラディックス様」

ラディックスの申し出を固辞しようかと思ったが、ラディックスの提案はニーヌの疲労を気遣ったの物ということぐらいニーヌにもわかる。

事実、疲労もピークにさしかかってきているため、その好意に甘えることにした。

ちなみに、納得のいつていないのはフェン。

「ちょ！なんで俺まで出なきゃいけないんだよ！あんなんラディックス大先生ならちよちよいのちよいじゃ！？」

「よし、そうと決まったら行くぞ。ニーヌはもし形勢が危なくなったら援軍を頼む。そんなことはないと思うけどな」

食い下がるもあっさり無視されるフェン。

いつもタイシにしている仕打ちを味わい、これからはタイシに少し優しくしようと心に決めた。

「ラディックスのおっさん、何で俺の部下は休んでて俺だけ戦わな

「きやいけないんだ？」

「……お前は敬語という物を知らんのか」

「お戯れを、いつも自分は敬語を使ってるじゃありませんか」

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$
$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$

恭しいフェンの物言いにジト目でフェンを睨むラディックス。

一方フェンは無理矢理戦に駆り出された恨みを解消しようとブツブツ文句を言っていた。

「まあいい……。フェン坊は俺と行動をとみにしろ。一度お前の実力をきちんとこの目で見たかったんだ」

「……まさかそれのために俺を駆り出したんですか？」

「ああ。当然」

「……早死にしますよ、ラディックス様」

フェンの文句をラディックスは無言の圧力で黙殺し、ラディックスの部隊は行軍を始め、配置についた。

そして、ガッスルフニンの軍を待ち伏せし、一網打尽にしようとする。

待機すること数十分。目の前にガッスルフニン軍が現れるとラデックスは一斉に合図を出した。

[illegible]

合図とともに一斉に駆け出すラディックスの部隊達。

ラディックスはその様子を見るとフェンに声をかけて自らも最前線へ突入する。

フエンもため息を押し殺してその場に応戦した。

フェンは剣を振りかぶると目の前にいるガッスルフニンの兵たち

に斬りかかる。

数の暴力に圧倒され、劣勢にあるガッスルフニン軍。だが、敵兵達もガッスルフニン製の強固な武器で装備を固めており（ガッスルフニンは鍛冶が発展しているため、武器・防具が充実している）、一筋縄ではいかなかった。

フェンも応戦し、ウエスタを召還しながら戦う。

そして、自分の相手していた敵兵数人を殺し一息ついたところ、いつの間にか隣にいたラディックスに声をかけられる。

「フェン坊、やっぱりお前俺の部下にならねえか？」

「……前にその誘いはお断りしませんでしたか？」

ラディックスはフェンの戦いっぷりに満足したらしく、にやにやとしながら緊張感のないことを言ってくる。

フェンはその誘いをあっさりと固辞すると、再び敵兵の方へと向かい斬りかかった。

ラディックスも笑みを消すと、フェンの方とは違う方向へ助け船に向かった。

その直後、フェンは遠くの方から聞き覚えのある金切り声を聞いたような気がした。

耳をつんざくような金切り声。

他の兵たちが気付いている様子も見られない。

「……ドラウグか？」

フェンはラディックスに視線をやった。

ラディックスは敵兵との戦闘に夢中になっているのか、フェンの様子を注視している様子はない。

フェンはドラウグの鳴き声を気のせいかと思ったのだが、再び金切り声が聞こえた。

だが、尚も他の兵たちに気付いている様子は見られない。
ラディックスにも先ほどの金切り声は聞こえていないようだ。

気になったフェンはこっそりとその場から離れ、声が聞こえた方向へとかけだした。

走ること、ものの五分。

そこには案の定ドラウグが暴れ回っていた。

フェンはドラウグに気付かれる前に木の陰に姿を隠した。

どうした物かとしばしの逡巡。

だが、すぐに答えは出た。

「……これは、いい機会か」

フェンのつぶやきに頭上のタルケがキューーつと返事をするように鳴く。

「ラディックスも気付いていなければ、ニーヌが見張り台で見てたとしてもこんな森の中を見渡すことは出来ない」

再びキューーつと返事をするタルケ。

「別に返事しなくていいって、タルケ。これは独り言なんだから」

「キューー？」

「とにかく、力を試そう。」

こんなチャンスを生かさない手は無い」

フェンは微かに震える手を握り、ゆっくりと自分に言い聞かせる。
初めて、今まで隠してきた力を解放する事への震え。

「俺が何のためにフェノア・ニクスとして生きてきたのか。」

何のためにこれまでアナーヒタの兵として戦ってきたか。

全てはこの国をぶつつぶすためだ。

レックス、しっかり見てくれ。

俺がサラマンダーの一族として戦う最初の戦いだ」

フェンはゆっくりと木の陰から姿を現すと瞳を閉じる。

ドラウグはフェンを見つけると近づいてくるがそんなことは気にしない。

大きく、深呼吸。

「集え、炎の精霊。我が名はヤン・ハムレット・ウオドゥン・フリーニ。我がサラマンダーの血族の力をここに示せ」

フェンの呟きに呼応するようにフェンとドラウグの間に紅の巨人が現れた

赤々と周囲を照らしながら燃えさかるような熱を発する、炎の巨人。

背丈は大きく、フェンの頭の高さでその巨人の腰ぐらいほどだった。

「スルト、蹴散らせ」

フェンは呼び出した精霊 スルト に命じるとスルトはドラウグに向かって歩みを始めた。

ドラウグは突如現れたスルトに驚き、歩みを止めていた。

スルトが歩いた大地は一瞬で焦げ付き、その熱はフェンの顔をじりじりと焼いてしまうように感じられた。

熱に耐えかねたフェンの頭上のタルケがフェンの服の胸ポケットにその姿を隠す。

スルトは空中に手をかざすと、どこからか真つ赤に燃える剣が現れた。

そして、その剣をゆっくりと振りかぶる。

ドラウグは先ほどまでの威勢はどこへ消えたのか、獅子に標的とされた動物のように後ずさりしていく。

一際、その場の熱が強くなったとき、スルトは炎の剣をドラウグに向かって振り下ろした。

次の瞬間ドラウグの首が地面のドサリと落ちる。ドラウグは断末魔の声を上げることも出来ず、静かに絶命した。

フェンは、その一撃を満足げに見送ると、スルトを自らの身体と融け合わせ、召還を止めた。

そしてゆっくりと足下のドラウグの胴体を確認する。

ドラウグは間違いなく絶命していた。

その死体をどこに隠そうかと考えていると突如、声かけられる。

「たいした物だな」

ラディックスに見られたかと慌てる。

だが、聞き覚えのない声色、そして、アナーヒタの人間がかけてきた言葉としては不適當な言葉の内容。

フェンは違和感を感じつつも慌てて周囲を確認した。

視界に入ってきたのは巨大な、黒狼。

先ほどのドラウグの大きさなど霞んでしまうほどの大きさ。全長10メートルほどだ。

鮮やかな毛並みの黒狼は鋭く巨大な牙をフェンに向けながら、鋭い爪で周囲の樹木を薙ぎ倒す。

そして、黒狼はフェンの目と鼻の先まで近づいてくるとゆっくりとフェンと相対した。

「ドラウグを囚にして貴様を呼び出しただけではあるな。貴様の真の力、存分に見させてもらったぞ」

「……囚？」

「ドラウグの鳴き声は貴様にしか聞こえていない。ネレイデスの亜種はこのようなことも出来る」

「親切なんだな、教えてくれるなんて。親切ついでに逃がしてはくれないか」

「否」

「……だろうな」

フェンは体中から湧き出る冷や汗を止めることが出来なかった。さきほどの力を使ったところで、この黒狼に勝てるだろうか。

この黒狼はおそらく書物に載っていた生物。

その名は――

「フェンリル、か」

「ほう、我の名を知っているのか」

「……書物で読んだよ。ヨルムンカンドとフェンリル」

「では、ヘルも知っているか」

「名前だけはな」

フェンリルはその場に伏せるとフェンをゆっくりと眺める。

フェンとしては逃げることも出来ず、戦うことも出来ず、その場でただ待つことしかできなかった。

「フェン、一体何があった!？」

ラディックスが慌てたようにフェンとフェンリルのいる付近に現れる。

見たところラディックスの部下はいなく、ラディックス1人だけ

のようだ。

ラディックスはその場の異様な状況に息を呑むとあわてて背中
の長槍を構えた。

「……ラディックス様は援軍を呼んでください。誰でもいい。
最低限の兵を残してこっちに戦力を――」

「何言ってやがる、フェン坊――」

「いいから早く！」

尚も言葉を言いたげだったラディックスだが深刻なフェンの表情
にフェンの顔中に吹き出す汗。

そして、フェンを逃がすことを許さない黒狼の様子からフェンの
言うとおりにするのが最善の選択と考え、一目散にヴァサームへと
走りだした。

「利口な判断だな、ヤン・ハムレット・ウオドゥン・フリーディーニ
「……なぜ、その名前を知っている？俺の本名を知るのはサラマン
ダーの一族だけのはず。スルトを呼び出したときの言葉を聞してい
たのか？」

「いや。我は貴様の名を元より知っている。そもそも知らないはず
がない。我々とそなたは対存在なのだからな」

「……対存在？」

「ヤハウエ。貴様がそう名付けられたときから全ては始まっていた」
「何を言っている？」

フェンリルは立ち上がると巨大な口を開き顔を天に向けた。

直後、天と地が震えた。

フェンリルの遠吠え。

その声は、音としての次元を超え、世界中に響き渡るように感じ
られた。

「ヤハウエ、貴様はこの世に破壊をもたらすだろう」

「……随分物騒なことを言うんだな」

「だが、私たちは貴様が生まれなければこの世に現れなかった。感謝するぞ」

フェンリルはフェンに背を向けた。

「何もしないのか？」

「ああ。貴様を殺すのはまだ早い。ヨルムンカンドも目覚めていなければ、ヘルの使い手も今は不安定だ」

「……精霊ヘル。死霊魔術を操る精霊が実在すると言うのか……？
ヘルの使い手はどこにいる？」

「オルクスは幼い。貴様が自ら探すのだな」

「おい、フェンリル？」

「また会うときが来るだろう、ヤハウエ。その時は貴様の命頂戴しよう」

フェンリルは来たときと同じようにゆっくりと歩きはじめた。

途中、フェンが倒したドラウグの死体を口の中に入れ、一噛みで飲み込んでしまった。

そして、森の中へと姿を消していく。

その場に1人取り残されたフェンはその場に座り込む。

「あれと戦うって言うのか……？」

思わず漏れた呟き。

その呟きは風に流され消えていった。

第九章 秘められし力（後書き）

一年空くとは……orZ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6867r/>

火トカゲと少年

2012年1月7日15時55分発行